

---

# 魂喰らいの怠惰な異世界生活

逆意識改革

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魂喰らいの怠惰な異世界生活

### 【Nコード】

N4775S

### 【作者名】

逆意識改革

### 【あらすじ】

死人の記憶の残照を見つけ喰らう異能の力、喰らった知識や経験を瞬時に己の物とする反則級的能力を持つ男、佐藤一彦。

人の努力を嘲笑うかの如き才能を持った彼が異世界でどう過ごすのか。

笑い未定、涙は多分無し、感動も多分無し。

決して善人とはいえない、小者で自堕落な主人公の一風変わった物語。

## 第一話：僕という化け物（前書き）

死人の記憶の残照を見つけ喰らう異能の力、喰らった知識や経験を瞬時に己の物とする反則級的能力を持つ男、佐藤一彦。

人の努力を嘲笑うかの如き才能を持った彼が異世界でどう過ごすのか。

笑い未定、涙は多分無し、感動も多分無し。

決して善人とはいえない、小者で自堕落な主人公の一風変わった物語。

## 第一話：僕という化け物

第一話：僕という化け物

化け物、怪物、モンスター。

呼び方は様々だが、人はその言葉を聞いて一体何を想像するだろうか？

おそらく、大概の人は漫画やゲームなどに出てくる不気味な風貌の生き物達を想像するだろう。

だが、もしこの世界に彼等が居たとしても、物の数日で駆除されてしまふのではないだろうか？

己の住む世界をも破壊しかねない程に人類が進化したこの世界において、

個人の脅威となる生き物はいても、人類の脅威となる生き物など存在し得ないのだ。

そう、それが例えば岩を砕き地を裂く異形の化け物であってもだ。人間の敵は所詮人間。

最も多くの人間を一番殺してきた生き物は、やはり同じ人間なのだ。なら、人の姿をした化け物ならどうだろうか？

時に飛び抜けた能力を持つ人物も化け物と呼ばれる事がある。尤も、その場合は大抵賞賛の意味もこめられて居るのだが。

だが、この世界にはそれとはまた別の化け物がいるのだ。

見た目も中身も人そのもの、どれだけ調べたところで判別不能。それで居ながら不気味でこの上なくおぞましい特性を持っている。

”魂喰らい”

魂とはいっても、そこに意思や人格があるわけではない。  
人の死後、その周辺に漂う残り滓を便宜上魂と呼んでいるに過ぎない。

そこから死人の記憶の残照を見つけ喰らう、異能の力を持つ化け物。そして、他人の知識や経験を瞬時に己の物とする反則級の能力。それが魂喰らいという人型をした化け物だ。

もし、そんな化け物が近くにいるとしたらどうだろう。

もしかしたら、会った事も無い自分の事を君以上に知っているかもしれない。

好きな物、嫌いな物、知られたくない過去も何もかも。

死んだ家族が喰われたりしたら、知られてしまうだろうねえ。

そういう可能性も決して無いとは言えないだろう。

とはいっても、それを確認する術は無いんだが。

ただ、僕ならそれはとても恐ろしい事だと思うな。

まあ、僕以外にそんな化け物が居るとは思えないけどね。

「佐藤さん、佐藤一彦さん」

看護婦に名前を呼ばれて、僕の意識は急に現実へと引き戻された。

どうやら、少し自分の世界に入り込んでしまっていたようだ。

看護婦に返事をする、と、急ぎ気味に医者の下へ歩いて行った。

中々返事をしなかった自分のせいだとはいえ、流星に睨まれ続けるのは居心地が悪い。

軽く会釈をして診察室に入ると、医者席の横に据えられた椅子に無言で腰を下ろす。

「今日はどうしました？」

「熱は無いんですが、朝から少し頭痛が…」

医者問診が始まった。

症状や発症時期の確認から始まり、視診、聴診、触診と続く。

勿論頭痛なんて無いし、身体も至って快調だ。

調べた所で異常個所なんてどこにも無いだろう。

今日僕が病院に来た理由、それは食事の為である。

ここは定期的に魂が補充される最高の餌場なのだ。

墓地や病院など、人が近づきたがらない場所程、狩場としては好ましい。

多くの人はこの行為を不謹慎だと思うだろう。

事実、人の死を期待するなんて不謹慎極まりない行為だし、

それ以前に人の記憶を覗き見る行い自体が人として恥ずべき事だ。

だが、今となつてはもう罪悪感を感じる事も無い。

僕は能力こそ非凡であるものの、内面は凡人そのもの。

それ故に逆らえない。

どんな天才であろうとも避ける事の出来ない努力という壁。

それを易々と、それも一瞬で越えてしまっただけの力。

この魅力に逆らい、力を封印して生きていける奴がどれだけいるだろうか。

少なくとも僕には不可能だった。

麻薬と同じだ。

この魅力ははずれ僕を殺す。

いや、もう人としては死んでいるのかもしれない。

それでも、この能力を手放す事などとても考えられない。

人は人を殺せる生き物だ。

精々小者らしく、どこまでも堕ちてやるさ。

「それでは、お薬の方はこちらになります」

受付の看護婦に薬を受け取り病院を出る。

仮病であるにも関わらず、かなりの量の薬を貰ったが、プラシーボというヤツだろうか。

まあ、どうせ飲まないんだから関係ないのだが。

今日は出来るだけ人通りの少ない道から道へと、適当に回り道をして帰る事にした。

もしかしたら、そこに思わぬ餌が落ちてるかもしれないからだ。

予想は当たった。

路地裏の隅の方に、微かに生前の面影を残した半透明の中年男性が漂っている。

だが、今になって考えれば、今時道端で死ぬような人間なんて滅多に居ないのだから、

落ちてる小銭を探すかのようにそこ等を歩き回ってもそう見付かるはずがない筈だ。

現に、路上で遭遇したのは今回が初めてである。

何故こんな所にいるのだろうか、それも確認してみよう。

僕はツカツカと無遠慮に近づくと男性の頭に軽く手を翳した。

相手は何も反応しない。

うん、いつも通りだ。

「じゃあ、いただきますっ」と

中年男性の姿がブレる。

断片的だったり明らかに不要な情報次々と廃棄し、記憶や経験を細かく分類する。

この作業がポイントで、ここで手を抜くと食事の手間や時間は100倍以上に跳ね上がる。

人としての食事はゆっくり味わって食べるタイプだが、化け物としての食事は手早く済ませるに限る。

一般人には魂なんて見えないので、傍から見たら不審者そのものしか映らないのだ。

まとまりのない情報を一々再構築していたらせつかくの食事の意味が無い。

それなら有用な情報を一から覚えた方がマシだという本末転倒な結果となるのだ。

その後は分類項目を流し読みして、必要箇所だけをピックアップ、調理完了というわけである。

その場にはもう何も残っていない。

「……ごちそうさま」

結果から言えば、ハズレだ。

そこそこ希少で有用な情報は持っていたが、既に取得済みだったという事だ。

所詮は運任せなので、当たりの出る可能性は決して高くないのだが、流石にこういう時は悔しい。

それに、死亡理由も「道を歩いたらいつのまにか死んでた」というよく分からない物だった。

死人の主観でしか分からない以上、こういう事は良くあるのだ。

結局、何とも言えないモヤモヤした気持ちを抱えたまま自宅のアパートの扉を開ける羽目になった。

アパートに戻ると、台所に直行し冷蔵庫の中身を確認する。

美味しい物を食べれば、今の陰鬱な気分も少しは和らぐだろう。



メニューを決めると、食材を取り出し慣れた手つきで手早く料理を始める。

勿論この能力も異能の力で得た代物であり、僕のお気に入りの能力の一つだ。

僕の体には死人から摂取した無数の知識や経験が詰まっている。

だが、ただ知っているだけではない。

己の身体能力の許す限り、それらの力を再現する事が出来るのだ。確かに、優れた体力や知力がなければ再現できない能力なんて幾らでもある。

格闘技を修めたとしても、今の身体能力では格闘家になんてなれないし、

将棋の定石や棋譜をいくら覚えたところでプロ棋士になんてなれないのだ。

しかし、特別な身体能力が無くとも習得出来る能力はそれ以上に多い。

それに、格闘技にしても将棋にしても、あくまでも一流を目指した場合の話だ。

覚ええないより覚えた方が良い、当然の事だ。

出来上がった料理を見てれば尚更そう思える。

「今日は散々な一日だったな」

作りたての料理を次々に口に運びながらも、つい愚痴がこぼれる。

今日は二人しか居ない大学での友人が二人とも休んだのだ。

そうになると、僕は一人で大学に行かねばならない。

流石に専門科目のテスト範囲を完璧に暗記した人物などそうそういないのだ。

ましてや、その幽霊なんてどれくらい居るといえるのだろうか。

僕にとって、ただ黙々と板書を取るなんて行為は最早拷問に近い。

その上、帰りに見つけ喰らった魂は全てハズレときてる。

流石にここまで重なると美味い飯くらいじゃどうにもならない。

まあ、所詮はスーパ一の食材だしな。

こんな日はさつさと寝るに限る。

食器を洗い場に持っていくと、服も着替えず布団の中へと潜り込んだ。

どうやら思った以上に疲れていたようで、意識は急速に遠のいていく。

そして、そのまま僕という化け物はこの世から姿を消す事になった。

第一話・僕という化け物（後書き）

4 / 1 5 第一話投稿

4 / 1 8 一部訂正

## 第二話：死者に縋る生者

意識が緩やかに回復していくのが分かる。

この後、遅れて五感も順番に覚醒していくのだろう。

聴覚、嗅覚、触覚……おかしい。

無理矢理に視覚を覚醒させ目を見開く。

「何だこれは？」

目に映るのは雲一つない青空。

先程感じた違和感は、この鼻をつく草の臭いと、頬を撫でるそよ風の感触だろう。

背中にも違和感を感じる。

ここが柔らかな布団の上で無いことは明らかだ。

とつくに目は覚めている筈なのに、体が思うように動かない。

ぎこちない動きで体を起こした僕の目に、今まで見たことも無い幻想的な風景飛び込んできた。

地平線の彼方まで続く大地、そこには見た事もない花々が咲き乱れている。

青緑ツートンカラーの多弁花等、綺麗な花では有るのだが、流石に違和感しか感じられない。

左を見るとこれまた大きな湖が光を反射してキラキラと輝いている様子が目に映る。

そして、その奥にはジャングルさながらの巨大な密林が、僕の視界を遮るかのように聳え立つ。

だが、それ等の風景を差し置いて目を奪われたのが、前方地平線の遙か彼方に見える大きな塔だ。

そう、地平線の向こうに建っている塔なのである。

最初は天を貫く不思議な棒にしか見えなかったが、よく見ると窓や

壁の紋様等がある事が分かる。

これもまたおかしい話だ。

そんな遠くの景色が見える事もそうだが、なにより僕は今眼鏡をしていないのだ。

眼鏡をしていない理由は分かる、寝る時に外していたからだ。

しかし、眼鏡をかけていない事に気づかない程、視力が回復していた理由はどうか。

「まあ、いい。調べれば、分かるだろう」

動揺する気持ちを抑えるように、ゆっくりと自分に言い聞かす。

そう、調べる手段はあるのだから調べればいい。

死者の記憶を喰らってゆく日々の中、習得した借り物ではない自分だけの力。

己が魂のデータベース化とその整理統合技術だ。

バックアップと現状のデータの比較を開始する。

身体能力の項に関しての相違点だけを抽出すればいいのだから、話は簡単だ。

「…何だこれは？」

先刻と同じ言葉が漏れる。

だが、そこに込められた驚愕は先程の比ではない。

おかしい、おかし過ぎる。

まず、第一に相違点があまりにも多い。

身体能力に関しては全ての能力地が若干のプラス修正されている。

とはいっても、元々の能力の低さから考えると、これでやっと通常レベルといった所だ。

視力は1・2、遠くの景色が見えた理由も視力が回復した理由も結局は分からずじまい。

それは良い、実際良くはないのだが、気にしても仕方が無い。

身体能力の強化自体は悪くない、これで使える能力の幅も増える。

いきなり複数の数値が一気に上昇した事に関する疑問は尽きないが、それに関しては、誰に聞いてもどう調べても分かりはしないだろう。解決の目処が立たない疑問などさっさと放棄するに限る。

真に問題なのはもう一つの方、明らかに見覚えの無い項目が勝手にいくつか追加されている事だ。

特に異様なのがレベル、保持魔力量、放出魔力量の三つ。

少なくとも僕はこんなアホな項目を作った覚えはない。

データがあるからといって、それが事実というわけではなく、あくまでも僕が客観的に他者と比較・計測して勝手に付けているだけだ。

身体能力に関しては実感があるので事実だと分かるが、こちらの方は今一信用できない。

まあ、信用できる方がおかしいだろう。

放棄するには大きすぎる疑問なので、一時保留という形にしておく。結局何一つ疑問を解決出来ていないのだが、このままここにいても解決しない事は分かりきっている。

何しろここには情報が何もない、情報収集をしない事には何も始まらないのだ。

とにかく、誰か人を見つけることが最優先、それが死人であれば尚良し。

死人は決して嘘を言わない、情報を隠さない、情報源としては何よりも優れているのだ。

実を言うと、湖の奥の密林からは死人の気配がピンピン伝わって来ているのだが、

流石に数が多過ぎてそんな危険地帯に足を踏み入れるのは怖い、無理だ。

とりあえずは、消去法であの塔を目指すことに決定する。

別に、あんな地平線の彼方まで行くつもりは無いが、目印になる物

が他にないのだ。

若干の気疲れを感じながらも、塔に向けて歩を進め始める。  
ここから僕の当ての無い旅が始まったのだ。

その僕の旅は開始2時間半で早くも終わりを告げた。

目の前には大きな街道があり、その先には高い城壁で囲まれた街が見える。

だが、そちらは本命ではない。

そもそも、街の門前では衛兵らしき人達がなにやら検問のような事を行っている。

幾ら入りたいと願っても、流石に今は入れないだろう。

入れる可能性も無い事は無いが、ここで下手に揉め事を起こせば、また当ての無い旅を始める羽目になる。

まずは何よりも情報収集だ。

前方に見える柵に囲まれた広大な墓地、僕はこの死の気配に惹かれてここまでやって来たのだ。

墓地に入ると一定の間隔で置かれた様々な大きさ形状の墓石が目映る。

広大な墓地には手付かずの新鮮な死人達が大勢彷徨っている。大当たりだ。

さあ、待ちに待った食事の時間だ。

チラホラと見える参拝者に注意しながら食事を開始する。

「ふむ、なるほどね」

10人程頂いた所で食事を一時中断する。

ひとまず情報の整理が大切だ。

まず、ここはジームルグ大陸最大の王国アリードで、目線の先に聳え立つ城壁都市の名はヴァンゲールというらしい。なるほどね、そこには大して興味が無い。

幾ら何でもここが元居た世界と著しく異なっている事くらいはとっくに分かっているからな。

次に、門前の検問もどきは通行料の回収らしい。

これには本当に困った。何しろこの貨幣なんて持っていないからな。

そして、ここには魔法があり、魔力を消費する事で使用出来るらしい。

保持魔力量とは、文字通り自身が持っている魔力の量であり、放出魔力量とは、魔法一発あたりに込められる魔力の量だそうだ。僕の放出魔力量は人並みで、保持魔力量は常人の100倍近いとみていいだろう。

食事の度に保持魔力量も上がっているみたいなので、それも仕方が無い。

つまり、力は普通だがスタミナは無尽蔵だという事か、酷い省エネ仕様だな。

レベルに関しての情報はなかったが、歴戦の戦士は鉄をも切り裂くらしいので、

鍛錬や戦闘経験を重ねる事で上がるのだと思っておこう。

というか、上がってくれないと困る。今のままでは単なるMP馬鹿だ。

当然、戦闘経験なぞ欠片も無い僕のレベルは0である。1ですらない。

最後に、ここには魔物という生き物がいるそうだ。

何を以って魔物とするのかはハッキリしていないそうだが、

魔物図鑑に載っている生き物が魔物らしい。

全く意味が分からんが、情報の所持者達の認識がその程度だったのだから仕方が無い。



とりあえず、せつかなので、この際魔法の一つでも覚えてみたい。剣や槍を使った戦闘技術は今回の食事ですれなりに会得したが、持って無いものは使いようが無い。

僕も格闘技に関してはかなりの高水準の物を会得しているが、流石に素手で魔物とやらと殴りあうのは無理がある。

さて、魔法使いはそこまで希少ではないらしいので、片っ端から食べに行くことにしようか。

今僕は魔法の練習の為に街から少し離れた草原にいる。

放出魔力量が多くない為、使える魔法は多くないが、8種類も使えれば上々だ。

というか、攻撃魔法なんて何種類も使えるは必要なく、現に何種類も使いわけている人は殆どいなかった。

大事なのは呪文の詠唱速度。そして、魔法と周囲への警戒を並行して行えるだけの視野の広さらしい。

まあ、両方高水準で会得出来ているので問題ない。

そもそも、食事でマスター出来るので練習の必要はないのだが、街への入り方が全く思いつかず、

実際に魔法を使ってみたいという思いもあり、息抜きがてらに遊ぶというわけだ。

基本的にはイメージ、放出、詠唱。基本的に魔法はこの順で行う。

使う魔法をイメージし、魔力を体から放出する。

それと同時に、呪文を詠唱する事でその呪文に該当する魔法を形成し、使用する。

呪文は古代語だそうで、その解読は出来ていないらしい。

威力こそ落ちるが、無詠唱でも魔法は使える為、魔法の種類から呪文を解読する事はできないそうだ。

さて、最初に使う魔法は攻撃魔法にしようか。  
魔法使いが最初に覚える魔法で、炎の矢を飛ばす基本属性魔法だそう  
うだ。

フレイムアローみたいな名前がついてそんな魔法だが、正式名称は  
「火の魔法 レベル1」だ。

難易度が上がる度に「火の魔法 レベル」という風に呼ぶそうだが、  
誰も使っていないらしく、  
皆炎の矢とか火の矢とか、勝手にそれっぽい名前を好き勝手に使っ  
ているそうだ。

「よし、まずはイメージだ」

色々考えたが、最初なのでゆっくりと丁寧に行うことにする。

頭の中に炎の矢をイメージ、方向は真っ直ぐ前方、数は4本、限界  
ギリギリの本数だ。

次は体から魔力を放出しながら呪文の詠唱か。

「エル リブーマル コキユード」

突如目の前に4本の炎の矢が現れると、次の瞬間には全弾射出され  
ていた。

実際に使ってみると、思っていたよりも速く感じる。

真っ直ぐ放ってしまったので、威力は分からなかったが、

矢の長さは約1m、射程の方はおよそ20m程である事が分かった。  
矢の本数だけではなく、射程や軌道も放出魔力量によって変わるら  
しく、

優れた魔法使いは数1km以上先から対象に矢を当てる事も出来る  
そうだ。

どこのスナイパーだよ。

次は無詠唱で試してみよう。

方向は真っ直ぐ前方、数は1本が限界。

どうやら矢の大きさは半分程度、射程距離は5m程らしい。

今度は斜め下に向けて打ってみたが、10cm程の細い穴とその周りに焦げた跡が微かに残っているのみ。

確かに、一長一短だ。

実際に矢を放つまでの時間は、通常なら急いでも2秒近くかかるが、無詠唱ならその4分の1で済む。

戦闘中の2秒は流石にでかい。ソロではとても使えた物ではないという死者達の意見も分かる。

息抜きにはなった。

魔法を使うのは楽しいし、魔法という武器を手にした実感を得て、不安も大分和らいだ。

だが、まだ一つ最大の問題が残っている。

「金だな」

そう、金が無い。

金が無いと食物も得られないし、そもそも街にすら入れない。

異世界でもやはり、最大の問題は金銭問題というわけだ。

そう考えると、この世界も元の世界と大して変わらないのかも知れないな。

中々にファンタジー世界も甘くない。

とても楽観できる状況ではないが、自然と顔には笑みが浮かぶ。

やる事は分かっている。先程の墓地に引き返せば良いだけだ。

いいさ、どうせ僕に出来るのは死人を喰らう事だけなんだからな。

難しい事は彼等に教えて貰えばいい。

異世界に行ってもやる事は変わらない。

死者から身包み剥いで懷を暖める日々が続くだけさ。

**第二話：死者に縋る生者（後書き）**

4 / 18 第二話投稿

### 第三話：他人への躊躇等なく

「ギイ！！」

硬い鱗に覆われた羊、アーマースープが悲鳴を上げながら倒れる。その隙を見逃さずに、落ち着いて二撃目三撃目を与えていく。立つ暇もなく氷の矢に貫かれ続けたアーマースープは八撃目でとうとう動かなくなった。

ゆっくりと死体に近づいた僕はアーマースープの角の付け根に氷の矢を打ち込んでいく。

別に死体を鰯る趣味など無い。

この角が薬師に高く売れるらしく、是非とも手に入れておきたいのだ。

だが、当然刃物など持っていないので、仕方なく魔法で切断しようと試みているというわけだ。

幸いな事に、保持魔力量だけは無尽蔵といって良い程にあるので問題は無い。

角を木に擦り付け、角に付いた肉をそぎ落とす。

これで、角は3対6本手に入った。

アーマースープの生息数からいえば、この成果は出来すぎくらいだ。

これで通行料の問題は何とかなるかもしれない。

やはり、人間社会でしか使えない貨幣を街の外で手に入れる方法等ないわけで、

ここは物々交換という原始の手段を行う事にしたのだ。

勿論、通行税は現金で払うしかないのだが、そもそも料金自体はそう大した額ではないのだ。

3倍以上の価値のあるこの角を渡せば、余程足元を見られでもしない限り、

通行料程度であれば喜んで建て替えてくれるだろう。

それが無理でも、街に入る商人を待つて交渉すれば良いだけの話だ。ここまで倒した魔物の数は8体。

アーマーシープ3体に角の生えた巨大なネズミ、ホーンマウスが5体。

いずれも弱い魔物しか現れないこの森においても最底辺の部類だ。

ハッキリ言って、アーマーシープ以外は余程の大量発生での無い限り、

討伐依頼すら出る事はなく、換金出来るような部位も無いので誰も狩らないそうだ。

それ故に、レベル0時点の僕でも危なげなく狩る事が出来た。

尤も、それは借り物とはいえ一流の戦闘技術を持っているからこそ出来る芸当なのだが。

レベルの2に上がり、微量ではあるがそれぞれの能力値も動きで実感できる程上がった。

そろそろ切り上げ時だ、街に向かうとしよう。

交渉は思いのほか簡単に進んだ。

というか、交渉にすらならなかった。

「いいのかい？　これ、悪いね」

という一言ですんなり街に入る事が出来た。

見慣れない服で怪しまれる事もなく、素通り状態だ。

これでは衛兵を置く意味がないと思うのだが、僕にとっては悪い事ではないので良しとしよう。

ただ、やはりいきなり街に向かわなかった事は正解だった。

話している言葉はこの大陸の共通言語らしく、何の知識もなく近づいていたら、

不審者扱いされた上に、最悪あの衛兵に槍でブスリなんて事にもなりかねない。

ともかく、街に入れた事で不安の大部分は解消した。

後は、ギルドに登録してアーマシープの角を換金するくらいしかやる事は無い。

余裕も出て来た事だし、街の様子でも眺めて楽しんでみるか。

街の中は外の閑散さからは想像も出来ないくらい活気に満ち溢れている。

街の入り口から直ぐの場所から延々と露天がひしめき合い、

売り手と買い手の値切り交渉などで非常に賑やかだ。

こういうのを見てると自分も参加してみたいくなるな。

墓地では目利きの能力も手に入れた事だし、試してみたいのは山々だが、

やはり、それをするにも換金を行う必要があるのだ。

「確か、狩人ギルドはここだよな？」

赤い屋根をした5階建ての建物、間違いなくここが狩人ギルドだ。石壁にかかった看板にも何種類かの文字で狩人ギルドと書かれている。

狩人ギルド、それは魔物の討伐や捕獲を生業とする者達の組織。そのネットワークはこの国に限らず、大陸全土に張り巡らされている。

ギルドの登録証はどの国でも使える身分証明であり、同時に能力証

明でもある。

勿論、ギルドは狩人ギルドだけではない。

傭兵ギルドに鍛冶ギルド、服飾ギルドや木工ギルド等、様々な組織がある。

表沙汰にはなっていないが、裏には盗賊ギルドという傍迷惑な組織もあるらしい。

扉を開けると直ぐに受付が見える。

右側の受付が依頼の受注や報酬の受け渡しを行う為の受付で、ギルド登録は左側の受付で行う事になっている。

「すみません、ギルドへの登録を頼みたいのですが」

受付の女性に声を掛ける。

流石、ギルドの顔である受付嬢、かなりの美人だ。

北欧系の顔立ちにブロンドの長髪を後ろでシンプルに束ねている。

「はい、ではこちらの申込用紙に必要事項をご記入の上、こちらに提出してください」

渡された申込用紙を持って記入用に用意された机に座る。

だが、書ける事はあまり多くなく、結果住所は未定で経歴は詐称というとんでもない代物になった。

家名は貴族の特権らしく、特に苗字に対する拘りも無いので登録名はカズヒコで済みます。

「これでお願いします」

「はい、かしこまりました。では、登録証の発行を行いますので少々お待ちください」



事前の情報通り、登録の際に逐一細かい事までチェックする事はないようだ。

ここで貰える登録証には、依頼の達成の際に依頼の難易度によって適宜加算されるポイントの合計に、今まで達成した中で最大難易度の依頼の情報とその際に加算されたポイントが記載されている。

そして、そのポイント合計と最高難易度が一定以上の基準に達すると登録証のランクが上がる。

ランクは紙、鉄、銀、金の3種類。

世間では金属板の登録証を貰えるようになれば一人前とみなされる。銀板にまでなると、向こうから名指しでの依頼が来る程だ。

「はい、登録が完了いたしました。こちらが登録証になります」

「あつ、有難う御座います」

紙で出来た登録証を受け取る。

とりあえずは、これで身分証明は問題なく出来る。

次は角の換金だ。幾つかの依頼の中から一番報酬が高い物を選ぶ。本数問わず、一本1000ゴルド。

大体、1ゴルドは日本円に直せば3円程度。

衛兵に渡した分を除けば合計5000ゴルド。

節約して過ごせば一週間は暮らせる額だ。

「この依頼をお願いします」

依頼と角をセットで受付に並べる。

「はい、では依頼の確認をさせて頂きます。アーマーシープの角、制限無し。」

角の個数は、ええっと…5本、奇数ですか？」

「ええ、お願いします」

衛兵に支払う通行料は現金での支払いが原則である以上、真実をいう事は憚られる。

だが、ここで嘘を付く事も得策ではない。

薬の材料といったある程度流通が限られてる品である以上、バレル可能性は十二分にある。

そうなった際に、ギルド側から不審がられるのは極力避けたい。

確かに、一体に二本ある筈の角が奇数個しかないのは妙な話だろうが、別にありえない話ではない。

角は薬の材料になるだけあって、結構脆く、

誤って攻撃を当ててしまうと簡単に砕けちってしまうのだ。

向こうで勝手に勘違いするのは向こうの責任なので、問題はないだろう。

さて、新しく用事も出来たことだし今日はもうギルドに用はない。

受付嬢から報酬と更新済みの登録証を受け取り、若干急ぎながらギルドを後にした。

ギルドを出た後は、一直線に路地裏に向かう。

勿論、それは新しい用事の為だ。

「ちょっと、いいですか？」

小太りの中年コンビがニヤニヤと笑みを浮かべながら近づいてくる。ギルドに入る前からこそそと後を付けて来ていた奴等だ。

そう、こいつらを処分する事がその用事だ。  
向こうはこちらを殺そうとしている。借り物の感覚がそう告げている。

当然恐怖はあるが、宿屋にまで付いて来られるよりはマシだ。  
寝込みを襲われたら一巻の終わりだからだ。

この世界に元の世界と同じだけのモラルを要求するだけ酷というものだろう。

元の世界にもこういうチンピラは何人も居たが、殺し合いとまでなると、流石に初めてだ。

だからこそ幸いだとも思う。

この世界で暮らすという事はいずれ殺し合いも経験するだろう。  
自分が人殺しくらいでよくよと悔やむような性格をしているとは思っていないが、

理論と実践は往々にして食い違いをみせる物だ。

初戦の相手がチンピラだという事は寧ろ好都合だと思っべきだろう。

「おじさん見てたよ。君今お金沢山持つてるよね。」

ちよっとおじさん達に恵んでくれないかな？」

腰のナイフを抜き、こちらの顔の前でチラつかせてくる。

きつと、こちらに人を殺せないだろうとも思っているのだろう。

人を殺せる自分は特別なんだと思っっている類の人間だ。

良かった、本当に良かった。隙だらけだ。

「イツ！！てめえ！！！！！」

ナイフを持った右手の手首を掴むと、強引に体を寄せて肩を極めた。  
同時に手首を捻り上げてナイフを奪い取る。

「止めっ……」

そして、一瞬の躊躇もなくそのナイフをクビに突き立てた。  
返り血が飛ばないように注意したのだが、手首の辺りが血で真っ赤に染まっている。

もう一人の相手は驚愕に顔を歪ませ硬直している。

何を驚いているのかは分かるが、そこまで驚く事ではないだろう。  
相手を殺そうとすれば相手に殺される事も当然ある。

碌な勝算も無いのに戦う方が悪いのだ。

可哀相ではあるが、もう一人の方にも死んで貰う必要がある。

下手に逃げして報復されてもやっかいだし、そこまで余裕があるわけでも無い。

硬直状態から回復したのかショートソードを抜いてこちらに向ける。  
が、遅い。

奪ったナイフで手首を切りつけ、そのままクビを掻き切った。

クビから大量の血が吹き出る。

正面から切ったせいで結構な量の血を浴びてしまった。

「もう、この上着は使えないな」

上着を地面に投げ捨て、炎の矢の魔法を数発当てて燃やし尽くす。  
死体には必要ないだろうと、二人の上着から財布を抜き取った。

ナイフとショートソードを装備し、周りを警戒しながらゆっくりと  
路地裏から通りに出た。

「こんな物か」

小声で呟く。

どうという事は無い、魔物を狩るのと同じ事だ。

声にならない悲鳴を聞いても、恐怖に歪んだ顔を見ても、何とも思わなかった。

心のそこから思っていたのだろう。

チンピラ如きがどうなろうと構わないと。

罪悪感を感じることもなければ気分が高揚する事もない。

ただ、一仕事終えた事への微かな達成感があるだけだ。

僕は人を過大評価しないし、過小評価もしない。

人は人を殺せるし、同時に慈しむ事も出来る。

僕のやった事はとても褒められる事ではないだろう。

しかし、特別狂った行動を取っているわけでも無い。

グギューグルググウ…

唐突に腹の音が鳴り出した。

慌てて周りを見回すが、誰も気にしていない様で安堵する。

確かに、あいつ等の末路なんてどうでもいい事だ。

別に深く考える必要などありはしない。

少なくとも僕の体は今日の夕食の方が大事だと主張している。

すっかり日も暮れたようだし、さっさと飯でも食って宿屋を探そうか。

さて、異世界最初の食事は何にしようか。

魔物の肉を使った料理なんていいかもしれないな。

今は美味しい物を食べてぐっすり眠れればそれで良い。

きつと明日も僕にとって良い一日になるだろう。

第三話・他人への躊躇等なく（後書き）

4 / 19 第三話投稿

#### 第四話：人との距離

予定のポイントが見える位置で気配を消すと、  
急いで敵に気付かれず狙い打てる狙撃場所を探し始める。

その結果、木の上というスタンダードな位置に潜む事となったが、  
所詮相手は魔物なので多分問題はないだろう。

今回の獲物グランドピッグは鈍重な魔物だ。

ただ、でかくて硬くて力強いだけの豚で、遠距離攻撃の出来る魔法  
使いにとつてはただの的ではない。

とはいっても、僕の魔法ではグランドピッグには大してダメージを  
与えられない。

本来であれば、仕留める為に多大な時間と労力を要する為、狩らず  
に無視する所だが、

今日はチームを組んでの狩りに参加しているので話は別だ。

別にチームを組まなければならない理由等は全く無い。

最近アーマースhipを探して狩りだけの作業にも飽きていたの  
で、

ちょっとした気分転換にと、丁度誘いをかけてきたチームに参加し  
てみる事にしたのだ。

人の事は言えないが、新人ばかりのチームなのであまり期待はして  
いない。

最近は多少蓄えに余裕も出て来た事だし、失敗してもそれ程問題は  
無いだろう。

僕の役目は至極簡単で、ここに獲物が追い込まれるのを待ち、最大  
威力の魔法を打ち込むという物だ。

遠くの方からグランドピッグの鳴き声が聞こえてくる。

今の所、追い込み班は上手くやっているようだ。

今のうちにイメージを明確にしておこう。

雷の矢を9本、斜め下予定ポイントに最短直線距離で飛ばす。

来たっ！

「リンド コーラル トウルーフィルド！！」

やや興奮気味に呪文を唱える。

タイミングは完璧、魔法はイメージと寸分変わらずグランドピッグに突き刺さった。

流石にグランドピッグの分厚い脂肪を貫き破るまでにはならないが、深く刺さった雷の矢はその瞬間に電流となって獲物の体内を駆け巡る。

全身に雷の矢を浴びたグランドピッグはまだその場から動けないようだ。

別に死んでいる訳ではない。

そもそも、この魔法は獲物を仕留める為の魔法ではない。

体内に流れた電流によって獲物の筋肉を一時的に硬直させる為の魔法だ。

一時的な硬直ではあるが、止めを刺すには十分な時間だ。

といっても、獲物に引導を渡すのは僕では無い。

グランドピッグの真横の茂みから2人の戦士が大剣を振り上げ獲物に襲い掛かる。

幾ら硬い皮と分厚い脂肪を持つとはいえ、鉄板さながらの巨大な大剣を弾くには強度不足だ。

真上から勢いを付けて叩きつけられた二振りの大剣は、グランドピッグの首と頭に命中し、

そのままあっさりと肉を切り裂き骨を砕いた。

間違いなく即死だ。

獲物が動かなくなるのを確認し、木から下りて彼等の元へ向かう。

グランドピッグの換金部位はその巨大な肉体全て。

こんな醜悪な顔面にも関わらず高級食材だ。

500kg近くある肉の値段は合計約50万ゴルド程になりそうだ。



5人で分けても一人当たりの取り分は相当な額になる。

そんな獲物なら狩り尽くされている筈だと思うだろうが、それはない。

とても一人で持ち帰る事が出来る重さではないからだ。

単独でグランドピッグを狩れるような狩人は、同じ労力でもっと稼ぐ事が出来る。

あくまでも、新人チームが一攫千金を狙うための依頼なのだ。

他のメンバーを待つ間、獲物を仕留めた戦士に混じり解体作業に取り掛かる事にする。

メンバーが揃う時には獲物はもうすっかりそれぞれの取り分に合わせて切り刻まれていた。

チームでの仕事が一段落し、反省会という名の打ち上げ会が始まった。

何が嬉しいのか全く分からない。

これから持つて帰る荷物の量を考えれば、とても喜んではいられないと分かる筈だが。

「お疲れ様、今日は助かったよ」

「いえ、僕はあくまで足止めをしただけですから」

「いやあ、その援護がなければあそこまで簡単にはいかなかったよ」

労いの言葉をかけて来たのはチームリーダーのジード。

馴れ馴れしく肩に手を回して来るのは気に入らないが、

彼もリーダーとして何とかチームをまとめようと必死なだけなので、

邪険にはしない。

性格は少し温厚すぎる所があるので、何かと苦労しているのだろう。当然、リーダーを引き受けるだけあって、この中ではダントツで一番の使い手だ。

最後に止めを刺した二人の大剣使いの内の一人でもある。

顔も良く、狩人には不似合いな気品まであるので、女性にはよくモテているみたいだ。

「私だつてあれくらいの事は出来たもん」

会話に割って入ってきたのはレイリアという名の少女だ。

見た目は亜麻色のショートヘアに碧眼の可愛い少女なのだが、中身は中々に嫉妬深い。

不機嫌さの理由は、魔法使いとしての活躍の場を取られた事に対する嫉妬だろう。

恋するリーダーに、僕の方が足止め役に相応しいと判断された事も原因の一つかもしれない。

「まあまあ、今日は新入りさんの力試しも兼ねてるんだからさ。

レイリアだつて彼の力を知りたいって言ってたじゃん」

「それはそうだけど…」

チームでの仲裁役は大抵この飄々とした男、ファルタートが請け負っている。

中々に大規模な商会の生まれらしいが、狩人をやっている理由は誰も知らない。

彼が獲物に止めを刺したもう一人の大剣使いである。

実力の方は僕と同程度だが、彼はこのチームのナンバー2だ。

自慢するわけじゃないが、それでも僕は新人としては破格の実力を

持っている。

レベルは5程度だが、借り物とはいえ戦闘技術は何から何まで全て一流だ。

だが、このチームには僕以上の使い手が二人もいる。

レイリアにしても新人としてはかなり強い方だと言えるだろう。

結成して間もないチームではあるが、彼等は既に中堅クラスに迫る実力を持っているのだ。

将来性を見越して彼のチームに入りたがる中堅処までいるらしく、その人気は相当な物である。

まあ、僕には別に成り上がりたいという願望などないので、チームに入るつもりは全く無いのだが。

「チツ、どこぞの馬鹿が調子に乗ってくれたおかげで獲物の質がガタ落ちだぜ」

最後のメンバー、ウォルターが嫌味ったらしく愚痴りだした。

こいつは何故か、戦士であるにも関わらず明らかに痩せこけている。ハッキリ言うところ長い。というか、弱い。

何故このチームにいるのかというと、どうやらジードの幼馴染らしい。

多分、雷の矢が刺さって焦げた部位について言っているのだろう。

「止める、ウォルター。それに付いては事前の取り決めどおりだろう。」

より確実な討伐の為だとお前も納得した筈だ」

制止に入ったジードが言うように、僕は与えられた役割を果たしただけなので文句を言われても困る。

おそらく、自分の任務に失敗して片腕を折った事で、新顔の僕に八つ当たりしているだけだろう。

追い込み班でありながら勝手に突っ込んで勝手に怪我をしたのというのだから、呆れるばかりだ。

そもそも、お前は弱いんだから無理するなよ。

この馬鹿のせいで、ただでさえ多い荷物が更に増える。

息抜きの為に参加したチームではあるが、ハッキリいって全然息抜きは出来なかった。

正直に言くと、報酬なんていらないので、宴会も肉も放り出してさっさと街に帰りたい。

アホに絡まれた件はどうでもいいが、この巨大な肉の塊を持って帰る事を考えると憂鬱な気分になる。

人間一人で出来る事は限られているが、一人で出来る事は一人でやれという天からの啓示だろうか。

あの一日から一週間、あの日の教訓を生かし、今までずっと単独活動を続けている。

幸いな事に大剣使いの二人が怪力だった御蔭で、山を往復する最悪の事態は避ける事が出来たが、

100kg近い肉を担いで山を下る行為は拷問に近かった。

ウォルターも、流石に作戦の邪魔をした事に少しは責任を感じていたらしく、荷運びには協力していた。

だが、レイリアの方が女の子に力仕事を云々とごねまくり、結局手ぶらで下りやがった。

当然チームへの加入は断っておいたが、それに一番文句を付けてきたのもレイリアだった。くだばれ。

あれからレベルは1つも上がっていないが、あの森の魔物相手では仕方が無い。

尤もレベルを上げる事には拘ってないので問題はない。

それなりに美味しい物を食べながらダラダラと暮らしていければそれでいい。

狩人という仕事を選んだのも、面倒事を極力避けて金を稼ぎたいという理由だ。

やろうと思えば鍛冶や裁縫だって出来るが、そんなチマチマした面倒な作業はやりたくない。

あの森程度なら危険は殆どないし、気分しだいで何時でも引き上げられる。

だが、元の世界に帰る方法を諦めたかというところというわけでもない。

魔法使いとしての生活はそれなりに楽しめている。

しかし、当然の話だが、中世レベルの文明しかないこの世界は元の世界に比べて娯楽が少ない。

魔導具という魔法を使って作られた道具もあるで、さほど不便ではないのだが、

ネットが使えない、ゲームも無い、漫画も無いとなると、僕としては少々不満が残る。

それなのに、僕が何かしら人に話を聞いたり書物を調べたりという事をしないのは、

そんな事するより死者を喰らった方が効率がいい、というだけの単純な話である。

だが、この辺にはもう大した魂は残っていない。

僕が根こそぎ喰らい尽くしたからだ。

先日の中でもそうだが、ここでの知り合いも大分増えてきた。

勧誘される事も絡まれる事も増え、そろそろ煩わしく感じてきた所だこれを機に、この王国の首都である王都ニールスリングにでも行くとするか。

人が沢山いる所には死者も沢山居るし、能力のある人間もまた然りだ。

そついった人の多い場所なら、おそらく個々人への関心も薄いだろう。

う。

人は人との繋がり無しには生きられないというが、その繋がりがいものである必要は全くないだろう。

話たり遊んだりするだけの友人ならともかく、僕には背中を預けあう仲間なんて必要ない。

寧ろ、僕はこの危険な世界でそこまで他人を信用出来る方が不思議だと思うね。

## 第五話：化け物の兄貴分

ついにヴァングールを出る日が来た。

馬車乗り場に付くと、王都行き駅の前には長蛇の列が出来ていた。旅行鞆を持った家族連れや体中傷だらけの傭兵くずらしき男達。流石にどんな大きな馬車でもこれだけの大人数を運ぶ事は不可能だ。多分複数の馬車が一塊となって王都へと向かうのだろう。というか、そうでないと困る。

あまりの客の多さに若干の不安を抱えて馬車を待っていると、遠くから見知った顔が近づいてきた。

「おーい、久しぶりだなカズヒト」

「お久しぶりですウォルターさん。後、僕の名前はカズヒコです」

随分意外な人物が見送りに来たものだ。

いや、王都へ行く事は誰にも言つて無いのだから、これは偶然だろう。

尤も、あまり喜ばしくない偶然ではあるが。

「どうしたんですか？ こんな所に」

「おいおい、ここへの用なんて馬車に乗る以外ないだろうが」

確かにそれもそうだ。

腕が治るまで旅行でもしようという事だろうか。

「いや、な。ちよつくら王都で一旗上げようと思ってデュランダルは抜けてきたのよ」

何も言っていないのに、勝手に自分から語り始めた。

そういえば、そんな名前のチームだったな。

しかし、一旗上げるも何も、確かこいつの腕は折れてた筈だが。

「嘘言つてもしやあねえな。実は、あん時のミスで戦力外通告されちまつてよ。

前回、これ以上勝手にしたらクビだつて言われてたんだよな。いや、でも俺は良かれと思ってやったんだぜ？」

「…そうですね」

何やら勝手に言い訳までし始めた。

こいつは一体何がしたいんだろう。

こちらとしては、そんな身の上話は心底どうでもいいのだが。てか、前にもやらかしてるのか。少しは成長しろよ。

良かれと思つてて、思つてなかったら最悪だろ。

「いやあ、こんな所で知り合いに会えるとは思わなかったぜ」

「こちらもです」

こればつかしはこちらも同じだ。

まさか、ここで会うとは思わなかったし、

姿が見えても声をかけてくるとは思わなかった。



「まあ、向こうでも宜しく頼むぜ」

「はい、こちらこそ」

そう返事はした物の、本音としては勘弁願いたい。

荷物持ちの件から考えても、根はそれ程悪くはないんだろうが、スタンドプレー以前に弱いし。腕折れてるし、何より鬱陶しい。

まあ、チームを組もうと言われたわけではないし、

引越しの挨拶みたいな物だと思っておこう。

そう考えている間に、どうやら結構な時間が経っていたようだ。

街の東門から馬車が続々と入ってくる様子が目に映る。

どうやらウォルターとのくだらないやり取りも良い暇潰しにはなつたようだ。

馬車に関しての僕の予想は当たたり。

12台の馬車が縦列に並ぶ様は圧巻の一言。

バスや電車にはない独特の迫力がある。

順番に馬車に乗り込んでいった結果、最後尾の馬車でウォルターと相席する羽目になった。

僕が一体何をしたというんだ。

馬車に揺られる事8時間、やっと王国の直轄領に差し掛かった。

ここまで来ると、王都までも後一息だ。

この旅で得た物といえば、ウォルターの情報という不要過ぎる物だけだ。

ウォルターは田舎町フェンブリックの小麦農家の三男坊としてこの世に生を受ける。

受け継ぐ遺産があるわけでもなし、こんな村に居ると駄目になると

村を出たのが15の時。

一か八かという覚悟で上京したはいいが、碌な経験のない彼が成功出来る筈もなく、

その日暮らして食うにも困る有様だった。

その時街で偶然会った幼馴染のジードに、チームへの加入を打診され即答。そして今に至る。

まとめるとこんな感じだ。

見事に何の役にも立たないし、どうでも良い。

こつ聞くと冷たい奴だと思うかもしれないが、

実際8時間延々と話されてみれば、僕の気持ちも分かって貰える筈だ。

一体どうやったら、こんなに長時間自分の事を喋り続けられるのだろうか。

「でな、そんな時俺が言ってやったわけよ。おめえの剣が泣いてるぜ、つてな」

「ほお、格好良いですね」

「だろ？それでな……」

まだまだ話は続きそうだ。

今になって気付いたが、下手に相槌打っている僕にも問題があるのではないだろうか。

実際は適当に聞き流しているだけだが、傍目には良い聞き役として映っているのかもしれない。

下手に親近感を持たれていると困るのだが、流石にもう手遅れな気がする。

ギルドが一つの街に二軒も三軒も建っている事はない。王都のギルドも当然一軒しかない。

別に禁止されているわけではなく、建てる意味がないので建てないというだけの話だ。

つまり、狩人として仕事をする限りは、こいつと顔を合わせないという事はまずありえないのである。

今の状況を分析すると、こいつとの仲はかなり縮まっているようだ。というか、こいつが一方的に近づいて来ている。

顔を合わせば声をかけてくるだろう。

そして、この奇妙な程に中身の無い長話を聞かされる羽目になりそうだ。

何より性質が悪いのが、そこに一切の悪意が無いという事だ。

流石の僕も、好意的に話しかけてくる人間に対して、鬱陶しいからという理由で無視する度胸は無い。

とにかく、今出来る事は一刻も早く馬車が王都に着くように願う事だけだ。

あれから1時間かけ、遂にアリードの王都ニールスリングに辿り着いた。

この1時間は今までの人生で最も長い1時間に違いない。

ここまで我慢した自分を褒めてやりたいくらいだ。

それにしても、流石王都といった所か。

門や石畳はヴァングールのそれに比べて新しい。

キッチンと定期的に路面の整備がされているのだらう。

建物もヴァングールは多種多様な物が雑多に立ち並んでいるが、

王都の建物には統一感があり、賑やかでありながら上品さをも感じさせる。

僕としてはこちらの落ち着いた街の方が好みだ。

騒がしいのはあまり好きではない。

「どうしたどうした？ 王都のでかさにビビッてんのか？  
いや、分かるぜ？ その気持ち。俺も最初に来たときはそりゃあ  
ビビクリしたもんさ」

当然、騒がしいこいつもあまり好きではない。

ふと思ったのだが、こいつはここまで喋り続けて、喉がかわれたり  
しないのだろうか。

馬車内でも水の一滴すら飲んで無かったような気がするのだが。

まあ、彼と一緒に居るのもここまでだ。

僕はこれから王都最大の墓地、グリム墓地に行く予定だ。

流石にそこまで着いて来ることはないだろう。

「じゃあ、俺は宿屋に行くとするか。お前も着いてくるか？」

「いえ、僕はちょっと先に用事があるので」

良かった。

食事時くらいは静かにしたいからね。

というか、流石に墓を1つずつ順にまわっていく様子は人に見せ  
られない。

幾らなんでもそれは怪し過ぎるだろう。

ここは断固として拒否せねばならない。

「どこだよ、何なら付き合っても良いぜ？」

こんな所で世話焼きスキルを発動するのは止めて欲しい。

お前はそういキャラじゃなかっただろ。

「お構いなく。ちょっとグリム墓地へお参りにいこうと思っている

だけです」

「何だよ、お前ここの出身だったのか。ここに親兄弟の墓でもあんのか？」

水臭えな。俺とお前の仲だろ？ お前の兄貴分として挨拶くらいしとかねえとな」

墓穴を掘った！

というか、僕がこいつの話を聞き流している間に、馬車の中で一体何があつたんだ。

いつの間にか兄貴分にまでなっているとは流石に予想外だ。

ここまで冷たく返答してるのに何故伝わらない。

とにかく、どうにかして一人にならないと。

「いえいえ、ちょっと魔導学者エアヒムにあやかろうと……」

「何だ、お前学者になりたかったのか？ 学者になるには大金が要るんだぞ？」

仮に学者になれてもそれじゃあ食っていけねえしな。あんなもん所詮は貴族の道楽だぜ」

「まあ、彼も爵位持ちの貴族でしたしね」

勝手に誤解してくれているようだが、この誤解は有り難いので訂正しない。

この魔導学者エアヒムというのは、今ある魔導具全ての基礎を作ったと言われる人物である。

魔導具は今や生活に密着した、必要不可欠な存在であり、

その基礎を築いた彼は、この世界で最も知名度の高い魔法使いなのだ。

別に嘘は吐いてない。

このエアヒムの経験知識を食すのが、今回王都を選んだ最大の目的だ。

勿論、彼を食したからといって、学者となれる訳ではない。

知識や考え方を真似た所で、発想力といった知能面までは真似できないからだ。

とは言っても、魔道具の基礎を完璧に学べるという点は大きい。

魔導具職人ともなれば収入は他の職人達とは桁違いに増える。

狩人に拘りがあるわけでもなし、魔導具職人になれるなら直ぐにでもなるつもりだ。

そうなれば、この男の長話にも付き合わなくて済むしな。

「分かってるなら良いんだよ。俺等みたいな奴が下手に夢なんて見ても空しいだけさ。」

現実的にならないと、現実的にさ」

急に現実主義になるな。

じゃあ、馬車で延々と夢について語っていたのは何だったんだよ。

「そうですね。じゃあ、そろそろ行きますので。また今度」

一々反論してもキリが無いので、さっさと話を切り上げよう。

それにしても、何でこんなに世話を焼きたがるのだろうか。

チームじゃ一番下っ端だったから、兄貴風を吹かせたいとも思っているのだろうか。

それにしても、僕がチームに参加した時には敵意丸出しだったようだが。

「おう、じゃあまたな」

やっと、別行動が出来る。  
もう10時間近く一緒にいるのだ。  
しばらくは顔も見たくないな。

ウォルターと別れてから半刻、今僕は念願のグリム墓地にいる。

この世界の墓地は、基本的に手入れが雑で荒れ果てている場合が多いらしいが、

ここは元の世界の墓地以上に手入れがされているらしく、清潔感すら感じられる。

とりあえず、死者は山ほど居るが、まずは目的のご馳走を拝みに行くだろうか。

初めて来た墓地ではあるが、死者の知識に頼らずともエアヒムの墓の場所は直ぐに分かった。

高さは5m程、長さにいたっては20mはありそうな石碑が立っている。

そこには長々と碑文が刻まれているが、そこには別に興味が無い。

問題はこの墓の規模、一人だけ別格と言って良い大きさだ。

このグリム墓地に埋葬される為には、かなり高額な埋葬料を払う必要がある。

つまり、ここに眠る人物は皆それなりの地位と財産を持っている人物だという事だ。

にもかからわず、一目で分かるその規模の違いは、そのまま彼の功績の大きさを表している。

心臓の鼓動が倍近いスピードで脈打っているのが分かる。

大物を目の前にした時はいつもこうだ。

実際彼を喰らったからといってそこまで得る物はないだろう。

元の世界でいう所のエジソンの知識経験を得るような物だ。

大昔の電球や発電機の作り方を知った所で何の役にも立ちはしない。僕は僕なのだ。エアヒムやエジソンにはなれないのだ。

それは分かっている。僕の興奮はそれとは別の所にある。

誰もが認める偉人の魂。それを誰もが意識すらしない小物が一方的に喰らい尽くす。

その許されざる行為への薄暗い背徳感。

「いただきます」

汚れた喜びを胸に抱えたまま、エアヒムの残照へと手を伸ばす。

そして、僕は今の幸せをしっかりと噛み締めながら、丁寧に一つずつ情報を取捨選択していった。

最高の気分だ。

ただの石の塊となつた石碑を目に収め、僕は彼の墓を後にした。

他にも墓は数え切れない程あるのだ。

何時までも余韻に浸っている暇は無い。

一旦冷静になると、グラム墓地の端へと足を向け、歩き始めた。

「ん？何だこれ」

ズボンのポケットに違和感を感じた僕は、迷わずポケットに手を突っ込んだ。

そこにあつたのは、四つ折にされた見るからに質の悪いA4サイズの紙。

余程興奮していたのだろう。

まさか、こんな大きな紙に今の今まで気が付かないとは。

得も言えぬ不気味さを感じながらも、僕はゆっくりとその紙を開いた。



『10時に白馬亭前に集合な。綺麗なねーちゃんか何人もいる俺のお勧めスポットを教えてやるよ』

……最悪だ。

## 第六話：リスクの許容量

今、僕は墓地での食事を消化しつつ、ウォルターに呼び出された白馬亭へと向かっている。

幸か不幸か、先程この街の住人を散々喰らった御蔭で、白馬亭の場所には手に取るように分かる。

気は重い、ここに活動拠点を移した以上、無視をすると後々面倒な事になりそうだ。

馬車代の事を考えると、拠点の再移動は出来る限り避けたい。

それに、魔導具職人を目指すなら、顧客面でも材料面でも、ここ以上に適した街は考え難い。

良い材料に客の多さ、入り込める隙間は充分にある。

商売で成功する秘訣は単純だ。

基本的には他者が売ってない物を売るか他者より優れた物を売るかの二つしかない。

前者はまずアウト。僕の頭脳では理論段階での複雑な計算は不可能だ。

最早、公式を覚えたらどうこうというレベルでは無い。

せいぜい、記憶にある設計図をそのまま作り上げるくらいが限界だ。では、それなら後者はクリアしてるかといえば、そうでもない。

品数、製造力、仕入先、販売ルート、顧客対応力、そして熱意。何から何まで足りない物だらけだ。

商売という物は、品物さえ良ければどうにかなるという問題では無い。

まあ、店を開く訳でも無し。正面から勝負する必要もなければ、一

番を目指す必要も無い。

好きな時に好きなだけ働いて、それなりに暮らしていく事が出来れば理想的だ。

とはいえ、そういった暮らしをするにもやはり金が必要。

魔導具の中心となる魔石。これは問題が無い。

魔力を溜め込んだ特殊な鉱石ではあるが、この世界では単なる一鉱石に過ぎないのだ。

質の低い物は碎いて魔硝粉という粉末にされ、主に魔導具のエネルギー源として使われている。

この世界の文明の根幹を支えている必需品だ。

質や大きさはピンキリだが、そこまで珍しい物ではないので今の段階でも充分手に入る。

問題は魔導具の製作に使う特殊な工具だ。

それ自体が非常に高価な魔導具であり、全て合わせると100万ゴールドを軽く超える。

一生狩人として生きられるわけでもなし、この出資は必要な出資だ。とはいえ、その費用を稼ぐ為に必死になって働く様な甲斐性はない。今しばらくはこのままの生活が続くそう。

これでは件の待ち人との縁もしばらくは切れそうに無いな。

ふと考え事を止め、顔を上げる。

視線の先に小さく見える白馬亭の看板の前に男が一人、彼だ。

まだ、約束の時間にはなっていない筈だが、

意外と律儀な性格なのか、それとも余程僕と話したい事があるのか。出来るなら前者であって欲しいものだ。

「おう、カズヒコか。早いな」

「ウォルターさんこそ」

「誘った俺が後から来るわけには行かねえだろ」

意外だ。

まさか、彼にそういう感性があったとは。

「じゃあ、早速行くか。ほれ、目の前のあの店だ」

そう言つて彼は白馬亭の斜向かいにある酒場を指差した。

入り口の真上に掲げられた看板には「歌う百年花」と書いてある。

百年花とは、僕がここに来て最初に見た青緑ツートンカラーの多弁花の事である。

他にも数十種類の色や模様があるらしいが、この花の最大の特徴は枯れない事だ。

花こそ萎んで実を為すが、その葉や茎は枯れる事なく、次の年に同じ場所で花を咲かせる。

その特徴から百年草と呼ばれているわけだが、この花は主に葬式の献花として使われている筈。

確か、この花は輪廻転生の象徴とされているそうで、

より良い来世を送れる様にとという意味を込めて供えられるらしい。

初っ端から何て縁起の悪い。

自分の中でどんどん不安感が増大していくのを感じながら、ウォルターに続いて店に入った。

店の中は意外と物静かな空気を醸し出している。

彼はもつと騒がしい場所が好きなのだろうと思っていたのだが。ウォルターの意外な嗜好に驚きながらも、彼が話し出すを待つ。一体何の話だろうか。

中に入って分かったが、ここはそこまで安い店ではないだろう。とても、そう易々と奢れる値段では無い。

腕が折れ、収入の当てのない彼にとっては尚更だ。

「早速で悪いが、俺の最後の仕事に協力してくれねえか？」

「最後の仕事……ですか？」

こいつは一体何を言ってるんだろう。

仕事と言うが、あんた腕折れてるだろ。

腕を再度見たが、やはりギブスを付けたままだ。

そんな腕では豚一匹狩れないだろう。

まあ、こいつは万全の状態で豚にやられた訳だが。

このままだと確実に最後の仕事が最期の仕事になるぞ。

狩人を辞めるという選択についての異論はない。

僕にとっても嬉しい限りだし、辞めるという事は次の職の当てでも見つけたんだろう。

流石にそこまで考えなしでは無い筈だ。

「いや、幾ら俺だってこんな腕で獲物を狩ろうなんて考えねえよ」

「それも、そうですね。すみません」

その程度の思慮分別はあったらしい。

僕だってそんな無謀な仕事に付き合う気は無い。

間違いない僕一人で戦う羽目になるだろうからね。

「魔鉱石の採掘作業らしいんだけどよ。報酬額が凄えんだよ」

「ラッセン山のですか？」

「何だよ、知ってんなら話は早え。1ルイスにつき10万ゴルドだぜ？」

「こんな仕事他にはねえぜ。こりゃあ、やるっきゃねえだろ」

どこまで考えなしなんだろうか。

ルイスは重さの単位で、1ルイスは大体1kg程、100ルイスで1レイドとなっている。

そして、基本的には3等級以上の品質の魔石を指して魔鉱石と呼ばれる。

ラッセン山はこの魔鉱石の最大産出地として有名だ。

1kg30万円程度と考えれば、確かに破格の報酬と言えるだろう。だが、何故そんな破格の値段になっているか。

簡単な話だ。そんな仕事を引き受ける人間が殆どいないのだ。

ラッセン山の採掘場所はワイバーンのテリトリーのと真ん中にある。豚にやられるお前にどうこう出来るわけないだろ。

確かにワイバーンを倒せる人間もいるが、そんな奴はこんな報酬額では動かない。

ワイバーンなんか倒しても大した金額にはならないしな。

豚の仕事と同じで、この仕事には旨みが殆どないのだ。

それでも報酬額がこの程度に収まっている事には理由がある。

黙っていてもこいつみたいに勘違いした馬鹿が何人も挑んでくれるからだ。

例え一握りでも運良く持って帰れる者が居る限り、この報酬額は変わらないだろう。

僕が先程喰らった奴等の中にもそれで死んだ人間は何人も居た。殆どが骨も戻って来ないにも拘らずだ。

総じて得られる物が殆ど無かったせいでかなり印象に残っている。

「そこ、ワイバーンの縄張りですよ？ 昨日も3人組の狩人グループが全滅してましたし」

一応忠告しておこう。

こいつ一人が死ぬ分には、単に後味が悪い程度で済むので放っておくが、

それに巻き込まれるのはご遠慮願いたい。

ここでスッパリ諦めてくれるならそれが最上の結果だしな。

「マジか？ …まあ、大丈夫だろ。こっちはお前も入れて4人だしな」

駄目だ、想像以上の馬鹿だった。

3人なら全滅したけど4人なら大丈夫なんて、一体どういう理屈だ。それにしても、他に2人も馬鹿がいたか。

王都に來た当日にいきなりチームを結成出来た点は評価するが、残念ながら今回ばかりは馬鹿を何人集めても何ともならん。

報酬額や魔鉱石には興味があるが、流石に割りに合わない。丁重にお断りさせて貰おう。

「あの…」

「いや、俺もそう簡単だとは思ってねえんだけどよ。

これが上手くいけば俺があの方エルマー商会に入れるんだ。

ここは俺を助けると思って、頼む」

ウォルターはこちらの発言を手で制すと、一気に自分の意見を言い切った。

フェルマー商会というと、この王都で最大の商会だ。

こいつを助ける気は更々無いが、商会には興味がある。

十中八九騙されてると思うが、御蔭で話を聞く気にはなった。

「フェルマー商会に？ 魔鉱石の採掘と一体どんな関係が？」

ここが一番重要なポイントだ。

金を払えば入れて貰えるという類の話であれば、速攻で断らせて貰うが。

「いや、その跡継ぎが俺のダチだよ。魔鉱石が採取できなくて困ってるって手紙が来たわけよ。」

んでよ、俺が何とかしてやるつつたのは良いんだが。それにレiriaの奴が文句付けやがって」

「それでデュランダルを脱退したわけですか」

「脱退っつーか、追い出されちまってな。でもよ、ダチの頼みは断れねえだろ？」

僕なら断ると思うが、とりあえず事情は分かった。

フェルマー商会の跡継ぎは顔も名前も十二分に知られている。

商会の跡継ぎという件は事実だろう。

確か、名はクレインだったか。商才はあるが、若干お人好しだという噂だ。

直接面会した人間も何人かいたが、その際の記憶を見る限りは概ね噂通りのようだ。

勿論、これは彼がそういった己を利する為の演技をしていなければの話だが。

流れとしては、友人の頼みだと言って、リーダーでもないのに無茶



な依頼を受けたと。

そこでしつこく食い下がってチーム追い出されたという所だろう。で、今更受けれないとは言えないから即席チームで挑もうという事か。

言葉通り友情が理由なのか、利に目が眩んだだけなのか。

どちらにしても、とてもまともな神経をしているとは思えないな。というか、大商会の跡継ぎが友達なんて、一体こいつの人脈はどうなっているんだろうか。

「分け前はお前が2で他の奴が1。俺は0で良いからよ」

「いえ、分け前は他の人と一緒に良いですよ」

まあ、商会に入れるとすれば、分け前無しでも充分利はあるだろう。ただ、僕としては分け前が半分ではとても割に合わない。寧ろ、そんな事をしたら他の2人と揉めるだけだ。

「いいのか？ そんな遠慮ばっかしていると人生損するぞ？」

お前よりはまともに人生考えてるから良いんだよ。

だが、それは言わない。

こいつは商会の人間になるかもしれないからな。

どちらかと言うと、そちらの方が僕にとつては利が大きい。

魔導具を売るにしても、質屋に入れるのと商会を通すのでは大違いだ。

商会としても、魔導具職人は一人でも多く確保しておきたい所だろう。

現に、この王都ではフリーの魔導具職人など殆どいない。

「ん？ ちょっと待てよ？ それって引き受けてくれるって事か？」

「ええ、構いませんよ」

今気付いたのか。

勿論、労働に見合うだけの対価があるなら依頼は受ける。

こいつ等ならいざ知らず、僕なら勝算は充分あるからだ。

別にワイバーンに勝てるとは言わないし、そもそもそんな事に意味はない。

ラッセン山のワイバーンは魔鉱石を餌にして人間という獲物を引き寄せて捕らえているのだろう。

奴等に遠方から人間の臭いを感知する程の嗅覚はない。

生還率の低さを考えれば、おそらく移動する魔鉱石の魔力を察知して追ってくるのだろう。

上位の魔物は必ずと言って良い程に魔力察知能力を持っているらしく、こいつもその例外ではない。

つまりは、魔力を漏らさなければいいだけの話だ。

そついう魔法もある。

とは言っても、本来魔力の漏れを抑える為の魔法ではなく、ただの対魔法シールドだ。

魔力を遮断する事で魔法を防ぐ為の魔法で、込められた放出魔力量によって強度が決まる。

だが、幾ら僕の錬度が低くても魔鉱石から漏れ出る魔力程度では破れたりはいしない。

規格外の保持魔力量で無理矢理シールドを維持し続けるという力技で充分対応出来る。

後は、ワイバーンの視界に映らなければいい話だ。

「恩に着るぜ。流石は俺の弟分だ」

あんたの弟分になった覚えは無いが、まあ良い。

よくよく考えれば、今回の仕事はそう難しい事でもない。

ワイバーンの目に映る可能性を考えて慎重な対応をしていたが、そもそもこれはチーム戦なのだ。

僕だけが働く必要なんてない。他の2人にもそれ相応の働きをして貰う。

そう、例えばオトリとしてとかな。

なに、彼等にはリスクを分散するために二手に分かれようとも言っておけば良い。

ここに呼ばないという事は単なる協力関係という所だろう。

それならそういった行動も不自然ではないし、こちらの評判が落ちる事もない筈だ。

僕には見ず知らずの他人まで助ける義理はないよ。

自分の事は自分で何とかして貰う。それが大人という物だ。

## 第七話：不死身の凡人

目の前には山賊風の男が二人。

おそらくウォルターが誘ったメンバーだろう。

見た目で人を判断するのはどうかと思うが、どう見ても山賊そのものの。

一体どういう人生を送ればこんな悪人顔になれるのだろうか。

「おう、兄ちゃんがカズヒコって魔法使いか」

「そんな細っこい体で戦えんのか？ ギャハハ」

先程から挑発をかけて来ているようだが、その内容があまりに予想通り過ぎて呆れるばかりだ。

まあ、実力の方も予想通りだろうが、こちらはそれでも全く困らない。

後腐れも無く囷に使える分、寧ろ彼等のこの性格は有り難いくらいだ。

「皆さんの足を引っ張らないように頑張りますよ」

こういうタイプにはそういっておけば良い。

案の定、山賊もどき達は舌打ち一つした後、面白くなさそうな顔をして酒を飲み始めた。

仕事前の飲酒はどうかと思うが、囷風情に戦闘能力は期待していな

いので放っておく。

「悪い悪い、準備に時間がかかって遅れちまったぜ」

そう言いながらもゆっくりと歩いてくるウォルター。走れ。  
何故か大型の台車を引いているようだが、行き先は山だぞ。

「流石は兄貴だ。これで大儲け出来るぜ」

「儲けは公平に、だよな？」

何時の間にかこいつらの兄貴分にもなってるのか。

まあ、馬鹿同士お似合いではあるが、そういう間柄なら圀の件は黙  
っておくべきだな。

「こんな所でいつまでもグズグズしてても仕方が無え、さっさと出  
発すんぞ」

お前を待つてたんだよ。

その後、ウォルターに二人を紹介されたが、記憶容量を無駄使いす  
る気はないので覚えてはいない。

寧ろ、ワイバーン相手の大仕事にも拘らず、余裕な顔をして酒を飲  
んでいる事の方が気になる。

もしかしたら、ワイバーンよりもこいつ等の小細工に注意した方が  
良いのかもしれないな。

「兄貴、ちょっと良いか？」

ラッセン山に上り始めた辺りで、山賊Aが突然話を切り出した。神妙な顔をしているが、どうせ碌でもない話だろう。

「ここは二手に別れて行動した方が良さそうと思っぜ」

「何でだ？」

これは好都合だ。

まさか、向こうから囹役を引き受けてくれるとはな。

勿論、向こうは向こうでこちらを嵌めようとも思っているのだろうが、

そう考えてくれている方がやり易い。

自分が騙す側だと思っていってくれた方が成功率は上がる。

絶対に成功するとは言いきれないが、今の所は何から何まで僕に都合よく動いているようだ。

「ほら、俺らだとワイバーンに見つかったら終わりじゃないっすか」

その通り。

罠云々を抜きにしてもこの作戦は中々悪くない筈だ。

相手を倒せない以上は、なるべくリスクは分散した方がいい。

例え、見つかる確立が上がったとしても、他の誰かが犠牲になる事でその分の時間も稼げる。

こいつ等は知らないだろうが、ワイバーンが魔鉱石の魔力を追ってくる以上、見つかるのは必然。

とは言っても、回避策を持っている僕にとっては何の問題も無いのだが。

「おいおい、始めっから諦めてどうするよ。負けるかどうかなんて

やってみなきゃ分かんねえだろ？」

それくらいは分かっておいて欲しい。  
相手を油断させてくれるのは有り難いが、流石に僕もだんだん不安になってきた。

二人組みを見ると、説得が進んでない事にイライラしているのが分かる。

もう、罨だと確信していいだろう。

それも、おそらく自らの安全を確信できるレベルの罨だ。  
勿論こいつらの脳内での話だろうが。

「と…とにかく、そういう事なんで、バラバラにやった方が得なんすよ」

「うーん…まあ、そこまで言うなら別に構わねえけどよ」

どうやら話は終わったようだ。

ウォルターの方はまだ納得できてないようだが、とりあえずは別行動が出来るので良しとしておこう。

それよりも、この程度の話も理解出来ないようだと言ったと商會に入ってもやっていけないだろうな。

こいつのコネが効く内に、別の商會の奴に顔売る必要がある。

全く、出来の悪い兄貴分を持つと苦労するよ。

山の中腹に差し掛かった時に、突然ウォルターが風上から異様な臭いがすると言いだした。

確認してみると、確かに何やら生臭い臭いがする。

この臭いについては、王都の冒険者の魂からその知識とセットで習得済みだ。

「臭い袋ですね」

魔物の嫌う臭いを出し、弱い魔物を避ける為の道具だ。値段も安く、何処の街にでも売っている。別段希少な物でも何でも無い。

「臭い袋お？ そんな物が何でここにあるんだよ」

そりゃあ、当然あの二人組み以外考えられないだろう。臭い袋程度がワイバーンに効く訳が無い。当然、こいつにもそれ位は分かるだろう。

狩人が通常の使用方法で臭い袋を使う事はない。魔物を狩るのが仕事なのだから、それも当然だ。

「さあ、それは分かりませんね」

そうは言ったが、使用目的も分かっている。まず、雑魚との戦闘を避けて体力を温存する為。そして、ある程度の知性があり、且つ人を襲う習性のある魔物をおびき寄せる為。

この場合は後者だろう。

こちら側にワイバーンの注意を逸らしておいてという事か。この程度の小細工があ之余裕の理由だとすれば、とんだ期待はズレだ。

「とにかく、ここは迂回した方が良いつて事だよな？」



「そうですね。そうしましょう」

臭い袋なんだから、当然臭いで分かる。

別に人間には感じない臭いも作れるのだろうか、

使用者側に発動してるかどうか確かめようが無いような物を作っても仕方が無い。

こんな猜疑心を煽るような小細工に一体何の意味があるのだろうか。ある程度臭い袋から離れると、服を叩いて臭いを落とす。

尤も、この程度の臭いならワイバーンに気付かれる筈もないのだが。まだ何かあると思っておいた方が良さだろう。

あれから半刻ほどが経ち、漸く採石場まで辿り着いた。

ワイバーンが住み着くまで使われていた物らしく、結構立派な造りをしている。

恐らく今頃あの二人組みは反対側の採石場で採掘しているだろう。

迂回した事もそうだが、どこその馬鹿が大きな台車を引いて上ってきたせいで大遅刻だ。

この距離だと悲鳴くらいは聞こえる筈だし、それを引き上げの合図としようか。

まだ襲われて無いと良いのだが。

「おい、ちゃんと手を動かしてるか？ サボるんじゃないぞ？」

そう言つてウォルターが急かして来るが、あいつは確か入り口付近でへばつてた筈だ。

まあ、折れた腕で山の頂上付近まで大型の台車を引っ張ってくれば、そうなって当然か。

自業自得なので全く同情はしないが。

「ああああ！！止めろお！！！！来るなあ！！！！」

早速馬鹿の叫び声が聞こえてきた。

幾らなんでも早過ぎる。

まだ採掘は全然済んでいない。

採掘量の指定はなかったが、流石にこれでは足りないだろう。

全く、罔としてすら役に立たないとはな。

愚痴りながら作業用具を片付けていると、突如二人組みの不快な叫びが聞こえなくなった。

だが、断末魔が聞こえてきた訳ではない。死んではいないのだろう。瞬殺されたという可能性もあるが、ワイバーンの激しい嘶きと攻撃音は未だに続いている。

まあ、坑道に籠れば少なくともワイバーンは入って来れないからなあいつ等にワイバーンから逃げきる程の能力があるとは思えんし、きつとそのパターンだろう。

「最高の展開だ」

顔に薄っすらと笑みが浮かんでるのが分かる。

何しろ、山を挟んで反対側にワイバーンが貼り付いてくれているのだ。

まさか、奴等がその身を犠牲にしてまで僕達を助けてくれるとはね。まあ、自らが望んで罔になった訳ではないとはいえ、ありがたい事だ。

そうと決まれば採掘作業を続けるとしよう。

どうやら、僕は奴等を必要以上に警戒し過ぎていたようだな。

それからおよそ30分、元々良質の採石場だったらしく、採掘途中の場所を力任せに切り崩した御蔭で予想以上に早く終わった。

かなりの魔鉱石が駄目になったが、別に僕の土地ではないので構わないだろう。

手早く採掘して持ち帰る。任務上は何の問題も無い。

「さて、あつちはどうなってるかな？」

作業用具をか片付けると、魔鉱石の入った鞆を背負ってウォルターのいた出口付近に向かった。

おかしい、何処にも居ない。

全く、厄介事ばかり起こしてくれる。

「ウォルターさ〜ん。聞こえたら返事してください」

一応呼びかけるが、返事などある筈が無い。

元々そんなに広い場所ではないし、肝心の作業用具が入り口付近に放ったらかしだ。

まあ、想像は出来る。

おそらく、あの弟分とやらを助けに行っただろうな。

最近分かった事だが、あいつは中々に面倒見が良いようだ。

あまり役には立たないので、能力のある者にとっては煙たいだけの存在だろうが、

そうで無い者にとっては結構慕われていたりするらしい。

とは言っても、あの二人組みは別だと思うがな。

だが、気づいて無い以上は仕方が無い。

あいつが死んだら僕が困る。

既にワイバーンと対戦してたら仕様が無いとしても、そうであるとは限らない。

とりあえず、呼び戻せるなら呼び戻しておかないとな。

商会の友人を見捨てて犬死するのとか何とか言っておけば大丈夫だろう。

ワイバーンのテリトリー内に他の魔物が近づくわけもなく、安全に逆側の採石場付近にまで辿り着いた。

坑道の斜め上から現場までゆっくりと這いよっているのだがウォルターの姿は未だ全く見えない。

これは諦めた方が良さそうだな。

距離はおよそ500m程、とても感覚の鈍重なワイバーンに気付かれる距離では無い。

が、そろそろ限界だろう。引き上げ時だ。

「居た」

そう思った瞬間、目線の先で草がザワザワと不自然に動き出した。

どうやらウォルターは坑道の真上に身を潜めているらしい。

猛り狂ったワイバーンには見えていないのかもしれないが、何時バレてもおかしくない状態だ。

あれは駄目だ。距離が近すぎる。

一足で飛びかかれる近さではあるし、本人もそのつもりなのだろう。だが、下位とはいえ竜種のワイバーン相手にあいつが片手でどうこう出来る筈が無い。

今の僕なら不意を打てばまず負ける事はないだろう。

ウォルターが気を引いてる間に最大威力で詠唱魔法を放てば、

それだけでかなりの手傷を負わせられる筈だ。だが、流石にここは「だろっ」では動けない。商会とのコネ如き、有って無い様な物の為に命までかける気は無い。短い付き合いだったが、これでサヨナラだ。ワイバーンに向かって飛び込んでいくウォルターを見ながら、僕はその場を後にした。

「ッ……！」

が、次の瞬間、ワイバーンの攻撃で崩れた岩の欠片が僕の目の前に落ちてきた。

よく見ればには岩盤には幾つもひびが入り、今にも崩れそうになっている。

ウォルターの無謀な特攻せいで危うく死ぬ所だった。

そのウォルターは上手い事坑道に逃げ込んだようで、中から何やら争い合う声が聞こえる。

「まあ、良い。どうせ死ぬのなら構わないだろう」

岩からこぼれ出た魔石の欠片を岩盤のひびに詰めながらボソリと呟く。

流石に今回ばかりは頭にきた。

自分の判断とはいえ、危うく死ぬ所だったのだ。

坑道の中の奴等の事なんて関係ない。

安全な所から全員まとめてぶっ潰してやる。

幸いな事にその手段に付いては先程の岩石落下を見て考え付いた。

後は、準備に少々手間取るくらいか。

坑道は高く切り立った崖の間に掘られている。

執拗なワイバーンの狩りによって、今や坑道は何時崩れてもおかしくない状態だ。

後は誘爆させてやれば良い。

別に左右両方の崖を崩す必要は無い。片方だけでも崩せばワイバーンに逃げ道は無い。

「空を飛ぶ利を捨てて、地に下りた自分を恨んでくれよ」

安全な場所まで下がると、急いで魔石の欠片を用いて作った導火線に魔力を通した。

ワイバーンがこちらに気付いた様だがもう遅い。

「フィロース エルド グリーデッド ヘル マキナ」

早口で呪文を完成させ、発動する。

放出した魔力を爆破させる低ランクの魔法。

だが、僕の魔力はひびに沿って延々と繋がっている魔石のラインに続いている。

この魔石全てを巻き込んだ爆発なら、崖を崩すくらいの威力は出るだろう。

案の定、魔法を放ったと同時に激しい轟音が鳴り響いた。

地盤が揺れ次々に崩れていくのが分かる。

流石にここまでの事態になるとは思っていなかったが、おそらく他の魔石にも誘爆したのだろう。

崖どころか、付近一帯が崩れてしまったようだ。

これならワイバーンも即死だろうな。

勿論ウォルターも即死だろうが、どのみち餓死か生き埋めかの二択なのだから、

生き埋めの方が楽でいいだろう。

そう結論付ける、僕は最初の採石場に戻る事にした。

あそこには大型の台車があった筈だ。有難うウォルター。

敵もない事だし、ゆっくりと帰るとするか。

それにしても、惜しい人物を失くしたようだな。  
実力さえ伴っていれば勇者と呼ばれるようになった可能性もあった  
だろうに。

「おい、誰か助けてくれー!!」

…あ、生きてた。

## 第七話：不死身の凡人（後書き）

商会の件まで終わらせるつもりだったのですが、削りきれませんでした。

そのせいで描写が飛びまくってるかもしれませんが、申し訳ないです。



## 第八話：節穴な観察眼

先刻てつきり死んだと思っていたウォルターだが、どうにか生きてはいるようだ。

採石場に置いていた荷物の下から助けを呼ぶ声が聞こえてくる。

正しくは、地面の下から発せられるているようだ。

もしかすると、向こう側の坑道がこちら側にまで伸びているという事だろうか。

確かに、向こうの採石場の方がこちらより幾分立派ではあったが、そんな無計画に掘り進んだら、何時坑道が崩れるか分かったもんじやない。

まあ、実際に崩した僕が言えた事ではないか。

それにしても、どうやったら良いのだろう。

幾ら薄い岩盤といえども僕の魔法では壊せないし、チマチマ掘り出すのも面倒だ。

となると、方法は一つしかないな。

まずは10cm程の穴をいくつか掘る必要がある。

荷物から作業用具を取り出すとコツコツと地面を掘り進める。

とは言っても、高々10cm程度なら時間もかからないだろう。

現に、もう既に一箇所掘り終わっている。

「おい！カズヒコか？　ここだ、助けてくれ！！」

下からウォルターの声がするが、真下に居ると危ないぞ。

まあ、もう後は爆破するだけだ。

その時に注意を促しておけばいいだろう。

そう考えながら魔鉱石を取り出し穴に埋めていく。

かなり高価な爆弾だが、損をするのはこの鉱山の持ち主なので問題ない。

ワイバーンの討伐如きに金を惜しむからこんな羽目になるのだ。

さて、着火するとしてよう。

先程分かった事だが、魔力溢れるこの場所では無詠唱でも大丈夫そうだ。

ただ、もしかすると坑道自体が崩れるかもしれないので、屋外から爆破させてもらう。

大丈夫だとは思うが、念には念を入れて行動した方が良い。

まあ、ウォルターがどうなるのかは分からないが、あの爆発で死ななかったのだから大丈夫だろう。

「じゃ、着火」

合図と共に先程使ったのと同じ爆破の魔法を放った。坑道内に轟音が響く。

流石は魔鉱石、比較的小さい物をたった5つ使っただけでこの威力。中を覗いてみると地面にぽっかり穴が開いているのが分かる。

そう言えば、あいつに注意しておくのを忘れていたな。

「ふう、全く。酷い目に遭ったぜ」

穴から救出されたウォルターは、意外な事にかなり元気な様子だ。尤も、両足がポッキリ折れているようで、全く無事ではないのだが。もう、まともに使える片腕だけだ。

そのせいで救出活動は非常に難航したが、  
ウォルターの持ってきた荷物にロープがあったので何とか救助出来た。

「それにしても、どうしてあんな所にいたんですか？」

よく考えると、さっきの爆発で僕が先の落盤事故の原因だとバレる可能性がある。

いや、普通はバレると思うのだが……まあ、こいつは馬鹿だからな。  
とは言え、こんな凡ミスをしてしまう辺り、僕も頭はそれ程良くない。

なので、ボロを出す前にさっさと誤魔化しておこうという訳だ。

「お前はあいつらの悲鳴が聞こえなかったのか？」

「いいえ、作業に集中していたので分かりませんでした」

当然聞こえてはいたが、こいつと揉めた所で何のメリットも無いので否定する。

どうせ、弟分に助けを求められたら助けるのが男だろ、とでも言うのだろう。

「兄貴分として、俺にはあいつ等を助ける義務があるからな」

いや、そんな物は無い。

やっぱり、予想通りの答えだった。

「それにしてもよ。お前はもうちょっと周りに目を配った方が良いぜ？」

危なっかしくて見てられねえよ。」

「…今後、注意します」

お前にだけは言われたく無い。

良くここまで自分の事を棚に上げれるものだ。

その神経の凶太さが羨ましいよ。

「ま、何かあったら俺が守ってやるからよ。安心しろ」

「それは有難いですが、肝心のその二人は？」

お前に守って貰う事はないだろう。

話が逸れたので一先ず元に戻す事にした。

まあ、聞くまでも無く死んでいるのだろうがな。

「いや、見てねえな」

「どついう事ですか？」

意味が分からない。

逃げ出した後だったという事か？

「…いや、あいつら奥の方に逃げてったみたいでな。探しはしたんだけど、思った以上に広くってよ。

でな、突然でつけえ音になって天井が崩れて来たんだよ。それつきりだな」

なるほど、まあ経緯はどうでもいい。

別に、あいつらの末路なんて聞きたくもないしな。こちらを疑ってないのなら何も問題ない。

用件は済んだ事だし、そろそろ撤収しますか。

「それは残念ですね。彼等の為にも魔鉱石はしっかり持ち帰りましようね」

「おう！ 台車も用意してあるしな」

それは諦めるよ。

どうせ僕が持ち運ぶ事になるのだろう。

言い合っても仕方無いので採掘作業を再開する羽目になった。

勿論作業人数も一人、結局働いてるのは僕だけじゃないか。

一時間後、台車いっぱいに詰まった魔鉱石は青白く輝いて居る。  
今日は僕がこの世界に来てから二番目に頑張った。一番は豚の運搬だ。

「おいおい、もっと山積み出来るだろ？」

その場から動く事すらままならない自称兄貴分が呟いている。

山に上って足を折っただけの癖に偉そうだな。

当然それくらいは考えている。

僕は無言でウォルターに近づくと、その体を軽々と抱え上げた。

「お…おい、何すんだよ」

まあ、その意見は尤もだ。

だが、そもそも僕の体力では魔鉱石が詰まった台車と鞆だけでも結

構な負担になる。

元の世界なら100m運んだだけで息切れをおこしていただろう。その上に成人男性一人抱えて山を降りるなんて、流石にゴメンだ。慌てるウォルターを台車の上に乗せると、先程使ったロープで固定する。

こうしておけば負担も多少は軽減できる筈だ。

「…お前、頭いいな」

お前が悪過ぎるだけだ。

応急手当くらいは施してあるが、山道を降りる振動は折れた骨には酷だろう。

医者経験も持っているとはいえ、こんな所では大して役に立たない。

まあ、役立つとしてもこいつ相手に使う気はないが。

今日は心身共に大分と消耗した。さっさと帰ってぐっすり眠ろう。

商会の件もあるが、こいつが満身創痍な御蔭でその日程も延期だろうしな。

そう考えながら、僕は子連れ狼よろしくウォルターの乗った台車を押して山を下り始めた。

三日後、宿を出た僕の前にいたのは両足にギブスを嵌めたウォルターだった。

折れた腕も器用に使って松葉杖を付いて歩いてくる。

これは怖い。

「安静にしてなくて良いんですか？」

これは本心からの言葉だ。  
本当に大人しくしておいて欲しい。

「いや、商会で働けるとなりや落ち着いてなんていらねえよ」

お前を見たら客が逃げるぞ。

それが嫌がらせと取られなけりやいいけどな。

「クレインの奴が今日魔導具屋の視察をした後、街を出るみたいだよ。」

今日を逃すと随分先になっちまうんだよ」

「なるほど」

お前の怪我が治るのも随分先になると思うけどね。

「で、俺の体もこのザマだからな。ちょっと運んで貰えねえか？」

僕は運送業者じゃないんだぞ。

不満はあるが、僕も商会へは用事がある。

せいぜい1、2km程度だ。

今の体力なら散歩程度の物だし、まあ良いだろう。

「ああ、ウォルターさんお久しぶりです。魔鉱石の件は本当に有難う御座いました」

人の良さそうな笑みを浮かべるクレイン。

胡散臭い事この上ない。

片手両足を骨折した異様な姿のこいつを見ての一言目がそれとはな。死者共の見る目も大した事はない。

所詮人は自分の信じたい事だけを信じるという事か。

「おう！ これからは一緒に店を盛り上げていく仲間だからな」

「…その話はこちらで」

クレインはウォルターを引き連れて奥の部屋に入っていく。

あいつは店の前で降ろしたので、僕が連れだとは誰も思っていないようだ。

幾ら馬鹿相手だからって、あそこまで露骨な態度を見せては駄目だろう。

誰がどこで見てるか分からないのだから。

ウォルターの末路には別に興味が無いが、おそらく口封じでもされるのだろう。

ただ、僕をぬか喜びさせた事は許せないな。

「うん、流石高級品だ」

魔導具の並んだショーウィンドを眺めながら呟く。

商品自体はそれ程高価なものでは無い。

僕が高級品だと言ったのは、この左手に隠し持っている彫刻刀の様な魔導具に対してだ。

彫刻は彫刻でも魔導具の核となる魔鉱石の中心に魔力回路を刻み込む為の道具である。

名前は魔刻刀という安易な名前だが、これが無いと魔導具は作れない。魔導具製作の必需品だ。



魔力回路とは、魔鉱石のエネルギーを制御する機構の事である。ここで失敗すると、魔鉱石の魔力が暴走して偉いことになるのだ。具体的には、あの崖で起こったような事になる。

だからこそ、優れた魔導具職人は必ず優れた魔刻刀を使う。

魔導具職人の間では、弘法は筆を選ばずなんて理屈は通らない。

まあ、実際弘法大師はかなり筆には拘っていたみたいだけだな。

要するに、これだけ離れた位置からガリガリ魔力回路を削っていき、この魔刻刀は、

かなりの高性能だという事だ。

20万ゴルド（60万円）近くかかっただけの事はある。

尤も、これは熟練した超一流職人の腕があつて初めて出来る裏技なのだな。

これで、商品の質は2ランクくらい下げられただろう。

商会に仕返しすると同時にライバルの評価も下げる、一石二鳥の作戦だ。

多少魔法を使える程度の狩人を疑う奴など誰もいないだろう。

僕を敵に回した事を後悔するんだな。

どうせ、僕がやった事すら気付けないだろうから、それも不可能だろうけどな。

「じゃあ、その怪我を治したらまた」

「おう！...じゃねえや。ハイ支店長」

「止めて下さいよ。私とウォルターさんの仲じゃないですか」

二人が談笑しながらゆつくりと出てくる。

どうやら商会で働けるようになったらしい。

見る目が無いのは僕の方でしたってオチか。

まあ、ここは素直に祝福するのでしょうか。

おめでとう、ウォルター。フェルマー商会万歳。

## 第八話：節穴な観察眼（後書き）

ここはウォルターさん酷い目に遭うの巻だったんですが、ウォルタールートが出来そうな位、兄弟分シナリオ多かったのが無理矢理プロット変更しました。シナリオ破棄です。流石に、この人とのパーティーはもういいや。

## 第九話：目まぐるしい毎日

一見煌びやかな王都にも影はある。

いや、光が強いからこそ、その影もまた色濃く残るのかもしれない。ここ、貧民街は王都中の闇が集まる場所だ。

街にはチンピラや娼婦が溢れ、それ等を統括する盗賊ギルドがこの貧民街を仕切っている。

王都の民からしても、彼等が疎ましい存在である事は間違いないが、ならず者が貧民街から溢れ出てくるよりマシだという理由で、国も半ば黙認している有様だ。

臭い物には蓋という事だろう。

それに、国に雇われている衛兵はあまり優秀ではない。盗賊ギルドが無くなれば治安の悪化は免れないだろう。

「おい、その坊主」

そんな貧民街を歩いていれば当然こうなる。

チンピラにしては随分と筋肉質な男だ。

だが、嫌らしい笑みを浮かべながら無遠慮に近づいてくる点は、ここ等のチンピラと何も変わらない。

尤も、見た目にしても実際の戦力にしても、僕なんかを警戒する方がおかしいだろう。

ここは人通りが少ない廃墟通り。周りには住居も無く、助けを呼んでも誰も来ない。

さらに、例え誰かが見ていたとしても、ここに人助けをするような奴はいないだろう。

それが、あのチンピラの笑みの理由であり、僕のこの余裕の理由でもある。

「ここはな、お前みたいな…」

相手が口を開いた瞬間、そこに右手に握りこんでいた石を放り込んだ。

その瞬間に爆破、炸裂音と共にチンピラの頭が弾ける。

そう、投げた石は小さな魔石。

わざとエラーを起こすように回路を彫り込む事で、小型の爆弾として使っているのだ。

大した威力は無いが、人間の頭を内から破壊する程度の効果はある。人を殺すのにミサイルはいらない、ナイフ一本あれば事足りるのだ。魔刻刀一本ではこの程度の物しか作れないが、一応は僕のオリジナル魔導具だ。

尤も、これを魔導具と呼べるかどうかは微妙な所だが。

「はあ…こりゃカツアゲもしたくなるわな」

頭が大破したチンピラの死体から失敬した財布を漁りながら呟く。健康そうな体をしてるので、それなりに持ってるんだろうと思っていたが、

所詮はその日暮らしの貧乏人だったようだ。

これで本日8度目、最早頭の中身を飛び散らせた死体を見ても何の感慨も沸いてこない。

既にこの作業もルーチンワークに近い。

死体の上に魂の残骸が湧き上がるが、こいつを喰う気は全く無い。どうせ大した能力はないだろう。

別に美食家を気取る訳ではないが、食事にも時間がかかるのだ。

今僕はそんな事をしている暇はない。

幾ら僕だつて魔石爆弾の実験程度でこんな所に来たりはしない。

盗賊ギルドの中の一勢力が俺を殺そうとしているらしく、

かといって僕も黙って殺されてやるわけにもいけないので、

殺される前にこちらから不意を打ってぶっ殺しに来てやったというわけだ。

どうやら、数日前に僕を狙ってたアホが死体となつて川に浮いていたらしい。

まあ、単独行動な上にコツコツ貯め込んでいたわけだし、狙われてもおかしくはないかもしれない。

で、僕を狙ってた奴が死んだんだから僕が殺したに違いないという滅茶苦茶な事をほざいているらしい。

ギルド中に知れ渡る前にその馬鹿勢力を潰さないと、一組織丸々敵に回す羽目になる。

この世界では元の世界とは比べ物にならない位に命が軽いという事は分かつていたが、

流石にそんな理由で殺されては堪らない。

いや、確かにその下っ端を殺して川に流したのは僕ただけどね。

奴等の溜まり場のドアに対し、独特なリズムのノックを行う。

これが合言葉代わりらしいが、随分と安易な合図だ。

「入れ」

許可も出た事だし、早速中に入るとしよう。

短剣を抜くと同時にドアを開く。人数はたったの3人。

所詮はヤクザ者という事か、警戒態勢を取っている者は誰一人としていない。

悠然とした足取りで部屋に踏み込むと、  
ドアの鍵を開けた目の前の若い男の喉に刃を当て、横一文字に滑らせる。

まだ、誰も気付いていないようだ。有り難い。

「え?…」

リーダーらしき男の横に侍っている、額から短剣の柄を生やした女がそう零す。

この世で最期の言葉としては、随分と間抜けな台詞だ。

「俺が盗賊ギルド…」

の一員と分かったの狼藉か、とでも言いたかったのだろうか。

いずれにしても、頭が無くては言葉を話す事など出来はしない。  
どうやら、魔石爆弾は至近距離で投げ込んだ為に喉の奥まで入ってしまったようだ。

男のクビが千切れポロリと床に落ちる。

「…面倒臭え」

そう吐き捨てずには居られない。

今回、どう足掻いても事態を安全域にまでは戻せないからだ。

こいつの記憶を喰らい、メンバー全員を把握した所で、それは変わらない。

例え僕への害意が無かったとしても、この件を知っている人間は全員死んでもらう。

そこは譲れない。譲らないが、それでも安心出来ない。

今回、魔法を使わず剣を使ったとか、カツラを被ってるとか、その程度ではどうにもならない壁がある。

人の口に戸は立てられないという言葉通り、噂なんて物は伝染病のように無秩序に広がっていく物だ。

殺して喰って、探し出してまた殺す。

そんな方法ではいつまでやってもキリがない。

勿論今回の行動は無意味とも言えない。

というか、無意味ならそもそもやらない。

今回の件がバレたとしても、やられたらやり返すという意思表示にはなる。

安全圏からどうこう出来ると思うなよ、という脅しをかけるわけだ。確かに、ヤクザ者にとって面子は大事だが、組織を左右する事柄に対しては

ある程度ドライにならざるを得ない面もある。

こちらに手を出すリスクを示しておけば、そういう面でそれなりの効果を示してくれる。

後は、この金庫の中身だね。

一勢力の長だけあって、それなりに持つてるな。

迷惑料としてありがたく貰っておこう。

貧民街を後にした僕は、魔導具の店に寄りたい気持ちを抑えながら、いつもの宿へと直行した。

魔導具製作用の工具なんて特殊な物を買ったりすれば、直ぐに足が付いてしまう。

そうポンポンと高価な魔導具を買うのは、流石に怪し過ぎる。

露天商は問題外。

あそこは既に盗賊ギルドの収入源の一つとなっている。いわゆる守り代というヤツだ。

お互利権でズブズブの間柄なので、通常の店以上に危険といえる。



幾ら、バレてもそれ程問題が無いとはいえ、自分からバラす気は全くない。

「あつ、カズヒコさんですよね？」

宿へと入ろうとした時、焦げ茶色の長髪に切れ長の目をした少年が声をかけてきた。

一見少女のようにも見えるが、骨格や声から判断するに、おそらくは男の子だろう。

当然面識はない。

ジードやレイリアにしてもそうだが、幾ら僕でもここまで整った顔立ちの人間を見忘れる事は無い筈だ。

それとは逆に、僕の顔立ちは覚え難い部類に入るだろう。

この世界では様々な人種が入り混じっており、アジア系の人種もそれ程珍しくはない。

中肉中背で髪はただ短く切っただけ、顔にも目立った特徴は無く、美しくも醜くも無い。

服だって、今はここで流通してる代物だ。

「そうです、そちらはどういう…」

「私、サレフと言います。宜しく願いますね」

そんな事は聞いていない。

僕はそちらの用件を聞いているのだが。

サレフはニコニコと無邪気な笑みを浮かべながら手を差し伸べてくる。

焦りのせい、つい乗せられて握手を交わしてしまった。

これが演技なら大したものだ。

ただ、少なくとも戦士としての能力は持っていないようだ。

この子の手は剣を振るう者のそれでは無い。

おそらく、金持ちの家の坊ちゃんって所だろう。

なら、声をかけてきたのは魔法関連だろうか。

それ程大した魔法が使えるわけでもなし、それもまた違うだろう。いずれにしても、僕への用件を聞かないことには始まらない。

「カズヒコさんも魔法使いなんですよね？　どこで魔法を習ったんですか？

私は去年までニールスリング高等理学院に通ってたんですよ」

「親に直接……」

「へえ、英才教育ってヤツですか？　うらやましいです」

何だコイツ、馴れ馴れしい。

駄目だ、喋りっぱなしで話を聞く隙が全然ない。

とりあえず、金持ちの家の子供だという事と魔法使いという事は分かった。

確か、理学院は魔法を理論から正しく学ぶ為の場だとか何とかで、当然そんな所に通えるのは金持ちの商人の子か貴族くらいだろう。少なくとも狩人になるような人間で無い事だけは明らかだ。

ますます、声をかけてきた理由が分からない。

出身地だの好物だの好き放題喋ってはいるが、肝心の本題の方が一向に出てこない。

キリの良い所でなんて言っていると、日が暮れるまで終わらない可能性がある。

「ちょっと良いですか？」

「それですね、ファンレーデルのパフェが……どうしました？」

やや強引に話を止める。

本当に何処まで話を脱線させるつもりだよ。

今日は心身共に疲れているので、早く休みたいのだ。

どれくらい疲れてるかという点、子供相手に敬語で喋るくらいには疲れている。

「結局、君は何を言いに来たんですか？」

ようやく言えた。

ここまで言えば伝わるだろう。

全く、こういう強引なタイプは苦手だよ。

嫌でも誰かさんを思い出す。

「ええと、何だっけ？ ああ、そうだ。私先月からフェルマー商会で秘書の方をやる事になりました」

成る程、嫌な予感しかしない。

出来ればクレインからの依頼が何かであって欲しいのだが。

「今はウォルターさんの秘書をやってるんですよ。」

予想外だ。

まさかそこまで偉くなつてるとはね。

幾らなんでもその待遇はおかしいだろ。

やれやれ、一体どんな無理難題を押し付けられるのやら。

まあ、あいつ相手なら自由に断れるし、逆に良かったかもしれん。

「ああ、ウォルターさんのね。それで？」

「これを聞いたら直ぐ俺の所に来るように、って言っていました」

… ああ、全然良くないわ。

用があるならお前が来いよ。

## 第九話：目まぐるしい毎日（後書き）

イベントをカットした弊害で登場人物までカットしてしまっ  
た。

プロットが既に半分役に立たなくなってます。

## 第十話：望む再会、望まざる再会

サレフに腕を引かれやってきたのは、寂れた一軒の武器屋。薄暗い店内に客の姿は見えない。

だが、それも仕方が無いだろう。

王都には武器屋なんて雑貨屋と同じくらい乱立しているのだ。

王都で一旗上げようと田舎から上京してくる人間は幾らでもいるが、まともな職につける者など極一部。

大部分の者が毎日命をベットしてその日の糧を得ているのだ。

狩人もその一部だ。望んでこの世界に入ってくる人間なんて殆ど居ない。

運良く職人の下に弟子入り出来たとしても、この世界の弟子というのは後継者でも教え子でも無い。

職人にとって、所詮は弟子などただの雑用に過ぎず、

弟子側は師匠の技を盗もうとするが、当然師匠側はそれを阻止しようとする。

技術一つ身に付けるにしても生半可なことではないのだ。

勿論、技術を身につけたとしても、資金や流通等、課題は幾らでもある。

この王都の安全は分不相応な夢を抱いた落伍者の犠牲によって成り立っているのだ。

「遅いぞ、カズヒコ！」

店の奥から聞き覚えのある声が聞こえる。

が、そもそもお前と待ち合わせをした覚えは無い。声に反してウォルターは笑顔で駆け寄ってくる。

何だこの反応は、気味が悪い。

何か嫌な仕事を任されそうな予感がする。

「店長、私もいるんですよ」

「おう、サンキューな。奥で菓子でも食ってて良いぞ」

不貞腐れた様子で抗議するサレフからは、先程よりも更に子供っぽい印象を感じさせる。

どうやら、ウォルターは子供にも好かれる性格をしているようだ。

だが、武器屋の店長とやりに秘書なんていないと思うのだが。

ましてや、こんな客一人いない店なら尚更だ。

まあ、お偉いさんの子供という事で色々あるのだろう。

僕さえ巻き込まないなら問題はない。

よって、この現状には大いに問題がある。

「子供扱いしないでください！」

「ガキほどそういう事を言うんだよ」

わざわざ人を呼び出しておいて、こいつ等は一体何をやってるんだ。まあ、確かに僕も、頬を膨らませながら子供扱いするなは無と思うが。

それにしても、店を見回してみても分かったが、客がいないのも納得だ。

フェルマー商会の品なのだから質自体はいいのだろうが、とにかく値段が高い。

質の良さを考慮しても相場の倍近い値段だ。

「カズヒコさんはどう思います?」

「お前は俺の味方だよな?」

こっちに話を振るな。

どう思っても何も、話自体全く聞いていなかったしな。

「さあ、どうでしょう」

適当に話を流す。

どっちにしろ、僕には関係ない話題である事に変わりはないのだから。

というか、早く用件を言ってくれ。

今日は帰ってグッスリ眠りたいんだよ。

「もう、ちゃんと話を聞いてるんですか?」

「ったく。しょうがねえ奴だな」

何で僕が悪い事になってるんだろうか。

だが、これはチャンスだ。

話が途切れた今の内に用件を聞き出そう。

「そつえば、今日は一体何の用なんですか?」

さも今考えたかのように聞く。

武器屋の依頼内容なんて想像も出来ない。

そもそも、僕もナイフやショートソードを使う事はあるが、

それ等は全てそこ等のゴロツキから失敬した物なので、武器屋自体



には全く縁がない。  
当然興味もない。

「何だよ。用がなきゃ呼んじゃいけねえってのか？」

当然だ。

まさか、用も無いのに呼びやがったのか。

自慢したかったのか、それとも祝って欲しかったのかは分からないが、

呼ばれる側としてはいい迷惑だ。

もう、体調が悪いとか何とか言って帰ってしまおうかな。

「おいおい、黙り込むなよ。ただの冗談だつての。」

いや、今日はちよつとお前に相談したい事があつてよ」

「相談ですか」

武器屋の悩みなんて相談されても困るのだが。

「いや、入って直ぐに店一軒まかされたのは嬉しいんだけどよ。」

見ての通り、全然客が来ねえんだわ。…どうしたら良いんだ？これ」

知るか。

何でそれを僕に相談するのか、さっぱり分からない。

「さあ、値段が高過ぎるんじゃないですか？」

それが全てだよな。

幾ら質が良いといつても、別に最高の品質だというわけではない。

この値段を出せばもつと良い剣が買えるのだから、ここで買う必要なんて全く無い。

「いや、でもよ。客が来ねえんだから、一本あたりの値段を上げねえと儲けが出ねえだろ？」

「で、値段を上げたらもつと客が減ったと」

「まあな……」

救いようがない。

秘書さんは忠告してくれなかったのかよ。  
ああ、菓子食ってるわ……この店潰れるな。

「で、結局どうすれば良いんだよ」

値段を下げると言った筈だが。

何も聞いちゃいないようだ。

仕方が無い、最終手段に出るとするか。

「いいですか？　そもそも商売というのは」

答えに困った時の蒞蓄攻めだ。

経営力テグリーを中心として、データベース中の知識を総動員して早口で捲くし立てる。

こいつに理解出来るはずも無いだろうが、正直僕も完全には理解していない。

というか、理解していても使えない。

とは言っても、相手を煙に巻こうとしてるだけなので、別に正しい知識である必要は無い。

要するに、尤もらしい事を適当に言っておいても問題はないという事である。

何よりも大事なのは、相手に考える時間を与えない事だ。

「〜という事です。あの、ちょっと体調が優れないようなので、今日はもう帰っていいですか？」

「あ…ああ」

許可も出た事だし、こいつの脳が回復するまでに帰らないとな。

これ以上、何のメリットない会話を続けるつもりはない。

ウォルターが店を繁盛させようが潰そうが僕には関係ない。

下手に対応策を授けて必要も無い責任を背負わされる事は避けたい。確かにこいつには荷が重いかもしれないが、武器は簡単に壊れはしないし、

放っておいても腐ったりはしない。

いきなり店を任せる事には驚いたが、それが一種の試験とも考えれば辻褄はあう。

こいつ相手にわざわざ試験をする必要があるのかどうかはまた別の話だがな。

店の入り口を潜り通りに出ると、外はもう真っ暗だった。

来た時はまだ夕暮れ時だった筈だが、随分と長話をしてしまったようだ。

認めたくは無いが、若干盗賊ギルドとのゴタゴタで沈んだ気持ちも、今は大分落ち着いている。

得る物が殆ど無いからこそ、こういった利害抜き of 貴重な関係が築けているのかもしれない。

ここは、彼の無能に感謝って所かな。

「今日は有難う御座いました」

僕に続いてサレフが店から出てくる。

何がおかしいのか、悪戯っ子のような笑みを浮かべている。

「私が何言っても聞いてくれないのに。ちょっと嫉妬しちゃいます」

もしかすると、そっちの趣味の子なのかな。

他人の性癖に対しては結構寛容な方だが、僕にそういう特殊な性癖はないので嫉妬されても困る。

尤も、寛容で居られるのは、一見可愛い女の子にしか見えない彼の容姿の御蔭かもしれないが。

これが、筋肉質な中年男性なら、流石にちょっとは引くだろうな。ともかく、おそらくこの子は頻繁に注意してるのだが、

ウォルターが子ども扱いして取り合わないという事だろう。

ひょっとすると、彼がウォルターのお目付け役なのかもしれない。まあ、だとしても役目は果たせてないのだが。

「ウォルターさん、お酒を飲むとよくカズヒコは自慢の弟分だって言うんですよ？」

「それは有り難いですね」

正直言つて、それ程有り難くはない。

彼と知り合つてまだ一ヶ月も経ってない筈だが、余程碌でも無い奴しか周りにいないのだろうか。

まあ、魔鉱石採掘の時に組んだ二人組みもアレだったしな。

「私も早く気に入られるように頑張ります」

その部分だけ聞くと、誠実な台詞の筈なのだが、

気に入られるの意味が分かつてるせい、かなり微妙な気分になった。

「ええ、頑張ってください。それでは」

このままホモの惚気話に付き合っても仕方が無い。  
軽く会釈をして去ろうとしたが、上着の裾を引っ張られ阻止される。  
当然それが出来る者等一人しか居ない。

「どうしました？」

内心のイラつきを感じさせないよう優しく問いかける。  
用件があるなら先に言っただけ。

「カズヒコさんって凄く商売に詳しいんですね。勉強になりました」  
成る程、確かに疑問に思うのも当然だろう。

とは言っても、知ってる事と使える事は別問題だ。  
能力を使っただけ、それっぽい知識を溜め込んでいるが、実際問題と  
ても使いこなせはしない。

経済は生き物だ、とはよく言った物で、結局の所はケースバイケー  
スで臨機応変な対応が求められる。

僕が取得した知識経験の中には、こういったコレクター感覚で集め  
た物もかなり多い。

それにしても、本当にあの話を理解出来たのだとすれば、それは驚  
異的なまでの才能だと言える。

僕なんて、ありとあらゆる知識や経験を喰らって尚完全には理解出  
来ないというのに、

まさかお菓子を食べながら口語で一発理解とはね。  
何故ウォルターの介護なんかを任じられたのか分からない。

ウォルター要らないだろ。

「それは秘密ですよ」

成人男子の台詞としては若干気持ち悪いが、これで良い。

下手に誤魔化してボロを出すよりも、一貫して秘密主義を貫く方が僕には向いている。

僕は本来交渉事や騙し合いなど得意ではないのだ。

ましてや、この子のような天才相手なら尚更だ。

「ええ。それはズルイですよ」

相変わらず、見た目同様子供らしい言い方だが、

もしかすると、それは周りを油断させる為の演技かもしれない。

そう考えると、自然とサレフが子供の姿をした化け物のようにも見える。

まあ、所詮は僕の妄想に過ぎないわけだが。

僕の観察眼が当てにならない事など、先日の事でよく分かった筈だ。無駄な考察は止めにしよう。

「秘密は秘密ですよ」

如何なる天才でも無から答えを出す事は出来ない。

特に、僕にはこの世界での経歴なんて殆ど存在しないからね。

勝てない勝負はしないに限る。

これが大人って物だ：なんてね。

理由は分からないが、気分が高揚しているのが分かる。

不安要素は多々ある筈だが、不思議と宿へと向かう足取りは軽い。

白馬亭。この街に来た日、ウォルターと待ち合わせた場所だ。今も僕はここに泊まっている。

何気に値段も手ごろでサービスも中々良い。何より食事が上手い。白馬亭一階にはロビー兼バーがあり、酒こそ飲まないが、毎日三食大体ここで食べている。

ウォルターにとってはちょっと高めの宿らしく、一人でゆっくり休めるのも有り難い。

今日は部屋に直行してぐっすりと眠ろう。

「おや、もしかしてカズヒコかい？」

この無駄に爽やかな声には聞き覚えがある。

というか、意図的に考えないようにしていたのだが、何故かここにジードたちが居る。

メンバーが一人増えているようだが、間違いなく彼のチームだ。

確かチーム名はデュランダルとかいったかな。

まあ、精力的に活動している彼等の事だ。

ウォルターと違って、正しい意味で一旗上げに来たのだろう。

「ああ、本当だ。こっちに来なよ」

ファルタートが誘ってくる。

善意でやってるんだろうが、今日に限ってはありがた迷惑だ。

僕はもう寝たいので、放っておいて欲しい。

レイリアが鬱陶し気に睨んでくるが、関わりたくないのはこちらも同じだ。

「いえ、少し体調が思わしくないので……」

「そうか、俺達もここに泊まってるから、何かあったら言ってくれよ」

キラキラと笑顔を輝かせながら言われても困るのだが。

そうか、ここに泊まるのか。

まあ、彼等との繋がりを保っておくのも大事な仕事だ。

ウォルターと違って、メリットはかなり大きい。

ただ、今日は色々と働き過ぎた。

樂をする為に苦労していたのでは本末転倒も甚だしい。

さて、急に賑やかになった僕の周り。きっと明日も大忙しだろうな。



## 第十話・望む再会、望まざる再会（後書き）

このペースはちょっと厳しいと気づいた今日この頃

## 第十一話：交わらぬ道

朝一番、部屋から出て宿の一階へと降りる。

そこで宿の主人に挨拶し、一人静かに朝食をとる。

それが、僕の決まりきった一日の始まりなのだが、

今日はそんないつもの風景に僅かな異物混じっている。

「おはよう、カズヒコ」

「おお、起きてきたか。体はもう大丈夫か？」

笑顔で挨拶をしてくるジードとファルタート。

レイリアが居ないのは有り難い、まだ起きてないのだろうか。

「お早う御座います。体調は大分マシになりました」

まあ、元々少し疲労が溜まっていただけなのだが。

それにしても、昨日は気づかなかったが、

彼等と組んだ時に比べて装備が随分立派になっている。

僕やウォルターが魔鉱石の採掘で稼いだ額でも、ギリギリ買えるかどうかといった高品質の代物だ。

確かに、素質があり向上心にも溢れている彼等だが、たった一月で稼げる金額なんて高が知れている。

一体どうやって手に入れたのだろうか。

「それにしても、随分良い装備ですね」

「ああ、分かるか？こいつが安く値切ってくれてな」

そう言いながら、ジードはファルタートの肩を軽く叩いた。

間違いなく嘘だ。

このレベルの防具はウォルター達が任されているような寂れた武器屋には無い。

それなりに格式のある店でないと手に入れる事すら難しいだろう。

そういった、客を選ぶような店で値切り交渉など考えられない。

確かファルタートはどこかの商会のボンボンだったと聞いた記憶がある。

どうせ偽名だろうし、調べようは無いだろうが、その筋で手に入れた品だろう。

「へえ、買い物上手なんですね」

「俺は値切りの天才だからな。安く買いたきや俺に頼めよ」

相変わらず飄々とした物言いだ、こいつにもまた色々ありそうだが、どっちにしろ、彼から自腹を切って装備をプレゼントして貰う事は無いだろう。

第一、彼にはそんな事をする理由が無い。

それに、商人の子というからには値切りも上手いのだろうが、それくらいで借りを作る気は無い。

値切りならウォルターだってそれなりに上手いので、物を安く買いたいならあいつに頼めば済む話だ。

尤も、あいつの場合は交渉術というよりは、貧乏人の知恵に近いのだが。

「そんなの何の自慢にもならないわよ」

面倒な奴が来た。

直接レイリアと話した事は殆ど無かったのだが、彼女がその可憐な見た目に反して意外と執念深い性格だという事は良く分かった。

ちよつと活躍の場を奪われたくらいで、未だに不満げな視線を送ってくる。

「ちよつと、私に挨拶は無いの？」

「はあ、お早う御座います」

挨拶して欲しいならそつちからすればいいのに。こつといった所が面倒なのだ。

「装備が良いのは私達の腕が良いからよ。私は自分に相応しい装備を付けてるだけなの。」

まあ、あんたにはそれが似合ってるわ」

「…そうですか」

お前の装備はそれ程でもないがな。

まあ、そういう意味では実力相応つてのは確かだろうね。

とすれば、新入りらしき奴の実力はあまり期待できないな。

ウォルターにしてもそうだが、何でそんな足手まといを入れるのだろうか。

ジードの性格からすれば捨石とかそういうのは嫌いだろうしな。

後、僕が今着てる服はただの部屋着だ。

こんな布切れだけで狩りになんか行くわけ無いだろ。

「そういえば、ウォルターと二人で仲良くここに逃げて来たんだって？」

あの馬鹿がうちのチームから抜けてくれて本当に良かったわ」

「おい、レイリア」

「あんた達みたいな向上心のない奴にいられると迷惑なの。今度あいつに会ったらそう伝えといてくれる？」

「いい加減にしろ！！」

ジードが怒声を上げて叱責する。

チームには甘い性格だと思っていたので、少々ビックリした。ジードに想いを寄せるレイリアにとってもそれは同じらしい。完全に涙目になっている。

まあ、流石に幼馴染に悪口は聞き逃せないという事だろう。

「悪いね。でも、別にあいつも悪気があって言ってるわけじゃないからさ」

「いえ、気にしてませんよ」

ファルタートが手馴れた様子で仲裁に入る。

だが、本当に僕はどうとも思っていない。

向上心なんて更々無いし、欲しいとも思わない。

そもそも、この能力さえあれば努力なんてする必要なんて殆どないのだ。

そう、何とも思っていない。

所詮、努力なんて物は持たざる者の泣き言に過ぎない。

おそらく、あの時よりも互いの実力差は開いているだろう。  
レイリア程度の才能では僕的能力には追いつけない。

大事なのは結果なんだよ。

ウォルターの事はそれ以上にどうでもいい。

あいつが馬鹿なのは疑いようの無い事実だからな。

あの後、本格的に泣き出したレイリアを置いて、今僕は一階で食事  
中だ。

二人は揃って彼女を宥めているらしいが、僕には全く関係が無いの  
で無視して来た。

そもそも、彼女だって原因の一つである僕に宥められてもいい気は  
しないだろう。

だが、これで静かに落ち着いて食事を取れるかといえば、そうでも  
ない。

名も知らぬチーム最後の一人が横で朝食を食べていて、僕としては  
少々居心地が悪い。

友人の友人と相席した時の様な気まずさだ。

おそらく向こうも同じような気持ちだろう。

面倒事が嫌いな僕としては、わざわざ食事をしに外へ出かけるのは  
避けたいのだが、

こんな日が続くようなら、それも考えないといけない。

「おいおい、お前ら何で先に二人で飯食ってるんだよ」

「だって、皆さん遅いんですもん。腹減り過ぎて我慢出来なかった  
んすよ」

ファルタートが一人で階段を降りてくる。

おそらく、レイリアの事はジードに任せたのだろう。

それと、僕はお前等と一緒に飯を食う約束をした覚えは無い。

さつきはさつきで気まずい思いをしたが、それ以上に気まずい雰囲気になる事は間違いない。

「ちょっと用事がありまして」

勿論嘘だ。

思えば、昨日から言い訳ばかりしてるような気がする、

「それでは失礼します」

「おいおい、そんな急ぐ事ないだろ？」

空になった食器を主人に渡し出て行こうとするが、

そこにファルタートからの待ったがかかる。

まあ、確かに用事は無い。

だが、別に彼等とは世間話をする様な間柄でもない。

「ウォルターから聞いてるかもしれないけど、

フェルマー商会の依頼で一番に反対したのはレイリアなんだよ。

ウォルターがウチから出て行った後も、あいつになんか絶対無理だ〜って言うててさ」

「まあ、そうでしょうね」

僕もワイバーンへの対応策が見つからなければ行こうとは思わなかった。

結局は使わずに無事帰ってこれたわけだが。

いや、ウォルターは満身創痍だったな。

「で、お前らが依頼達成しちゃったもんだから。ほら、な？」

その後もファルタートの話は延々と続く。

どうやら、レイリアの敵意の原因は、また例によってあの嫉妬癖らしい。

ウォルターの実力は充分分かってるメンバーは、依頼達成のキーが僕にあると踏んだそうだ。

実際は運が良かっただけなのだが、そんな事が彼等に分かる筈もない。

僕への賞賛。きっとそれは彼等にとって何気ない世間話のネタだったのだろう。

だが、彼女にはそう映らなかったという事だ。

自分が無理だと思った依頼を成し遂げた。それも自分と同じ魔法使いがだ。

それも、きっと許せないのだろう。

まあ、言ってしまうえば結局は唯の八つ当たりである。

全くフォローになっていない。

そもそも、別にジードとファルタートの二人なら真正面から戦ってもギリギリなんとかなる筈だ。

ただ、ウォルターは勿論として、レイリアもワイバーン相手だとハッキリ言って足手まといに過ぎない。

あくまでも、足手まといが二人も居るから「無理」だというだけの話なのだ。

彼女の言う「無理」とはまた意味合いが違う。

その点、僕はあいつが死んでも「あゝあ」で済みますからな。

「とまあ、こういう訳だ。おっ、来た来た」



ファルタートの視線を辿ると、ゆっくり階段を降りてくる二人の姿が見えた。

なるほど、長々と喋っていたのはこの為か。

「ほら、レイリア」

ジードが優しい声で促す。

何をさせたいのか丸分かりだ。

そういう誰の得にもならない気遣いは本当に止めて欲しい。

「さ…さつきは御免なさい」

「いえ、気にしてませんよ」

二階でファルタートに言った言葉をもう一度繰り返す。  
こんな不満そうな謝罪を聞いたのは生まれて初めてだ。  
何で僕が気を使わなければならないのだろう。

それにしても、何やら外が騒がしいな。

悲鳴が聞こえる。、どうせ殺人事件でも起こったのだろう。  
僕の横をジードが走り抜け、宿の外へと飛び出した。

野次馬根性じゃあなさそうだ。

遅れてレイリアとファルタートもジードに続く。

新入りは普通に食べてる。こいつ、食べるの遅いな。

だが、本来ならこの新入りの反応が一番正しい。

この世界では人殺しなんてそんなに珍しいものでもない。

流石にこんな大通りでの殺人なんて事は滅多に無いが、

それでも月に一度や二度は起こる事件だ。

顔色を変えて飛び出すような事ではない。

それに、悲鳴が起こるという事はもう事件は半ば終わってる筈だ。  
全く、世間知らずな奴等だな。

新入りをおいて三人の後を追いかける。  
まあ、勿論僕は野次馬感覚での見物目的ですけどね。

人垣の隙間からチンピラ八人の死体が見える。

そりゃあ、騒がしくもなるわけだ。

ジードはと言うと、その内の一人を取り押さえているようだ。お見事。

人垣からは「いいぞ兄ちゃん」なんて声が聞こえてくる。

だが、所詮はチンピラ同士の揉め事に過ぎないのだから、褒賞等は全く無いだろう。

やれやれ、正義感溢れる若者は大変だね。

一歩引いた位置から様子を眺めていると、見知った顔と目が合う。

「カズヒコさんも見物ですか？」

サレフか、仕事はどうした。

まあ、どうせ仕事は大人に任せて子どもは外で遊んで来いだの何だの言われたのだろう。

今日は白いブラウスにチェックのスカートか。

まだ10代前半だろうに、相変わらずの堂に入った変態ぶりだ。

さっきの台詞を聞いてレイリアが睨んでくるが、

ここに居るのはお前等以外全員面白半分で見に来た野次馬連中だ。

「さあ、どうだろうね。そういうサレフはこんな時間にこんな所に居て大丈夫なのか？」

話を摩り替える。

なるべく騒動の種は作りたくない。

賢いこの子の事だ、それくらいの意図は汲み取ってくれるだろう。

「ええ、お店は順調なので大丈夫です」

「はい？」

流石にそれは無いだろう。

あの状態からたった一日で店を繁盛させる方法なんて存在しない筈だ。

「ああ、勿論武器が売れる原因は別にありますよ」

「戦争でも始まるのか？」

幾らここが大陸最大の国だといっても、敵対してる国はいくつもある。

例えば、西方のナウラ砂漠一帯を統べる大国シュナードや天然の要害に守られた北方の国サジなど。

王国の権勢が衰えれば、その牙をむき出しにして襲い掛かってくるだろう。

僕的能力では、国内外の情勢といったタイムリーな知識を得る事は中々難しい。

知らない内に活動拠点が戦争状態になっていた、なんて考えたくも無い。

「まさか、違いますよ。何かガラの悪い人達が色んな武器屋で武器を買い漁ってるみたいです。」

まあ、理由は私にも分かりませんけどね」

流石にそれだけだと何も分らないな。

だが、武器という物は相手を傷つける為に持つ物だ。物騒な事に変わりは無い。

知っておきたいが、知る為の手段が無い。

ガラの悪い奴等を片っ端から殺して回る訳にもいかないしな。

「ほら、あの人達も今日店に買いに来たんですよ。それがちょっと気になってたんですよ」

成る程、それは有り難い。

こんなベストタイミングで死んでくれるとは、僕も中々に運が良い。どうせ衛兵が来れば、野次馬の数も減っていくだろう。

夕食後にでも食べにくるかな。

その時には衛兵も居なくなってる筈だからな。

全く、僕が来て一月程度しか経っていないのに、心が休まる暇が無いよ。

## 第十一話：交わらぬ道（後書き）

ちよつと更新速度が落ちると思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4775s/>

---

魂喰らいの怠惰な異世界生活

2011年5月6日06時17分発行